源氏目案

中よりやまて

源氏目案巻第三

よ

一 よろづの事にも　万事の万度ハ何度も末代まで記して置也

一 よるべなく　河　寄所無　　一 よせとなく　縁者　餘情ニ説也

一 よりせずハ　不能　不善　あしくせずと云心也

一 よろしくよらんに　されてもなきすまじきことぞよろしからう
そらいと猶家ハ大るなりなかくをなすよりも家まる一家也

一 よもぎふ　蓬の生しげりたる所を云也

一 よこさまなるやうにて　横死とて人のそれこそにて死たる
を云也　　一 よるのおとゞ　夜殿也　清涼殿
まわり四方妻戸有南ハ大妻戸一間有

一世人 よ人々の文字をかへてよむべし。後宇多院の御諱
世仁（ヨヒト）とかきしハ遠慮ある故也
更衣によそへるは心也。又夜つゞきは。夜をかさぬるとも也。夜続
一よそひ よそほひや
もいへり
是はさるべき女の心ざまそのさるべきやうなるさへをいふ也
一ようさり 不過（ヨギヌ）や
絶とこふ心
あらぬ人のやうにとや
おひたるあれハとや
一よみがへる 蘊生（ヨミガヘル） 又活（ヨミガヘル）

一よそへさるゝ心にいふべき 夜つゞきハ
一よすが 便（たより）也 縁（えん）への事ニ
一よかはの山のふもとにも
一ようさりよるになるとよむ也。
一世をそむきしやうに人をも
一世のまじらひにて 継母（ケイボ）継子（ケイシ）の
一よろづゆづりのさま也
一よりてこそ 女のそれぞれにて

御とのゝまへてぞうたてけるにぞ云へやらじとすさまじきことも也
一よそひの程どもまばゆく 源氏十六歳 御息所廿三歳
一よぶね 打（うち）はらぬ心也
とかくはてよむ也
一よれつれなきさまの物語
一よづかぬ 世なれぬ心也
の意はおもはずなるさま世はいふべし
一よし波の 玉かれゆくやうに源の心地そてよみ也
一よそへ行 あざむくかたまよへつや
一世にまじらぬ 世に差別（サベツ）也
と共在（キヤク）へゆづりあへるや

一よべ このよの夜の事也。よんへ
一よぎる 過（スギ）るをいふ心
出家あれバ本意（ホイ）をとげぬの事也
一世にふる さためぬ意（ゆゑ）とはぬる時（とき）
一世の中 桐壺帝（キリツボノミカド）の御位 久年
一世の中ゆるとも世のおもしろしや。恐

の字を万葉に用
惠心僧都号横川僧都
源氏左遷の叓ぬべし。惡拓などの八字のすをもよほしあふ
叓也。宇治の巻にえしたり
たる衣なれば志ほたるしとも
手 清門佐なるべし。同とハ前のゆげいの義人の事也。廷尉佐
別当の下也。志ことをふなり
尚有徑寸之殊。照車前後各十二葉。楚王臣階侯蛇病愈
ましに七寸の玉を合て夜まて。恩を報じたり。階侯此玉
を得て。楚王に献じて。夜中に常に有光明。故名夜光王
一世代にましし給ふき 明石入道。瑞夢をもちてあいへり

一よ何の僧都 中宮の御おぢや。
一よりぬことどもいでくめれば
一よる波に 此海にて用ゐし
一よしきうもおなじすけにて
一よりひかりかん玉の 史記曰
一よりぬもれて 枕草子に。すき海じ記すに。老女のけしやうせ
一よしみされおとゞ 手 良房のおとゞの例にて。お紙馬を引
る。後代にもち例もちぬたる叓ぞ 河海妄 紙。良房公乃時の
事ハ前見たしかるべし。もやまとしかるべし
一 宮まち紙志めて うたの物語に紀伊国むろの郡に神
なひのこれ松といふ長者。頃上の演のもとに四面八町の内に紫
檀蘋芳くろかひ。かしもたるを云ますを枕木として金銀瑠
璃。車渠馬瑙の物語を作りかさねて。東陣のとにハ春山南乃
陣のとにハ夜のかけ。西の陣のとにハ秋の林。北にハ松の林四面を
絶くかうへたるとこそ。此叓を模するに
一世のことひの後のとそれと 後の父を父とをもとゝ云ますあるに

一 よぶけく 弄のどかなる心也
信し給ふ
執政人 四十賀 古堀河の御はいまうちぶ 四十賀 九条の家
にて 葉平猶茂の哥を詠
一 よろこひなども 玉がづら 後三
一 よそちよなりなべてれば 油賀
一 よれつれの 朱雀院の 卸葉賀
とゝめしは引也 よれつれなりしずと院をなぐさめ給也
一 世をけれ 世代ゆれ 世代ゆれとは うき世代のがるゝさいのゝ也 おなじ
所とは 歸老をとゝちいれゝる也 おなじ 蓮の所代 弱めへとの心也
一 よろかゝしすこゝ 夢を信ずるは 小兒女子などこのむすと云ん
れ 孫 夫人云 夜夢不順 此心まや
一 よるの此帳のうゝびゝを よりてながしあけて 女三の此しんなる
所 帳臺の夏也 惡鬼をそれのゝまに 三又ぢうりうく 造るとゝ人

ゆ 夜の用をはすしのうゝひゝを四方よりうる也 それをこれ
がるや
一 よるとしう 菓蔭水暗螢知
夜 朗 雲は夜をしる 深はさしき 無分別 也 深のさはひるとも不消とや
一 よそてまては 槁木 葉枝なくして もぎあげうる事也
一 世代いとふ 八重ゝろ雲をへぐてゝ 八宮の世をいとひ給ふをの給也
冷泉は此心はうゝへども えそむき給ふぬとれ心也
一 よもれ山の猿を 雪を云也 夜所に此詞あり
一 世をよゝめしなれ 大君と慧とれ中の賢 無實ゆをいへり
一 よれのつゝ物 賭 俗よりけをすりといふ也 賭弓もかけ物也
一 よそへてそ 朝がれを大君に比して大君によそへて中此君を
こんとれ心也
一 よ代うこ中に 方士 又旁

求四虚上下。東極。跨蓬壺。見宛高仙山。多樓閣。西廂下。有洞戸。東舘。岡其門。署曰玉妃太真院。長恨哥傳

一よもぎれまろれ　よもぎれまけさ有ま一宵きたる心成べし

た

一玉のおのこ物子　玉はみめたる詞也　玉の緒といひかけたる

一たゆげ　たるき心也

一たくれ　雛堪

一たくれ　遠ちかへ三月

一たくれゆく　まかろしは方士也　幻術士が名也　玉のありかとは。

更衣の竜のまゝ所をいへり

一大涙の芙蓉未央柳　見長恨哥

大涙は池の名也　芙蓉は蓮の花也　未央は宮の名也　蓮花柳は楊貴妃

とも女ごへたる

一大床子の却れ　禁中は大床子不

とてき机を二そくに胎をゆるや是は常にまいる供物也おもれは胎をゆるや

一たいくしたさ　退く殺　不漂

一たくよはさし

一たく人　たぐふどくよむや　拆改開白とも　帝の御上よるとも　只

人との給也　親主の分限よりは海さり給とや

一たつぎ　便

一たくぬべき　給也　たくぬるは湛也

一大きくして　此時人の家どうじとすべきにあるとへたり

一立田姫　こいそんなも　女の物ちどぎ上手に深おしたるよう

たくへていふや

一七夕のまゝも　たちぬかつる

も上手なれもや

一たのめたる　粗也

一たとしへなくたとへなくや

一たとしん人　分別すくへなくや

しは助詞也

一たうがこ　鼻紙也
一たそかれ　誰ぞとうるがふほどにくらさ夕を云也
一たゆます　ゝもまぬやゝもむハ由所也
一滝口　あつかりの子ハ　禁中にて滝口の宿衣中女人武家
よりとるゝや院にてハ武者所といふ也源の番の者を滝口とん
得あふや
云也
物なり
孫也　系品にこも
といふ国司ハ一任四ケ年とて国司になりてハ又重めに必ず
なるや　その受領ごとに縁にいひあはせんといへだうけひがるや

一たちとまり　色うくハなど立
とまり給はぬぞ　草の戸ざしなれバさりなべきにもあらぬと云也
一たいに　東の射也
一たいやまれ　ゝやすさと云詞
ゝハの字をそへたり
一大鼓をさへかうらんのもとに
地下の家人庭上にその役也　花　礼記曰鐘鼓在庭琴瑟在
堂　今案大鼓ハ必堂下にて打るや　俗寛治五年五月廿五
日　夜上競馬六番の時　主上自打大鼓給ひ時置堂上也
一大もん所　禁中にて女房達のあるかや
一たとやき　婀娜　梅仙家
一たんぬん給はる　花鳥云
先第一儒者奉仰獻題次書韵字盛中垸置庭中文
臺上近衛次将先探御料韵二字置莒蓋昇自御前

階獻之次王卿堪属文者文人未各進文臺頭探一字
見之奏官性名及所探字也今案探韵ハ各一字詩也
悉韵字かりる也故懐紙謂作云春日同賦春夜翫梅花
各分一字應製詩 探得其字ヲめ以書へきや
一大将の志 大将ハ系譜よりも愚相まで兼ずる識也源氏ハ此時
参議大将也宰相兼大将例藤原房前冬嗣云常行一条ノ接政
一大将の志もしかうまつり給 参議二人の内一人まであるかと也 花略
一大将の志もうをまて後 葵上の事給ひたるハ此息所を源の
お妻なもと世上よりも又望の家のうちにも忘れたるとも
一たけかしねハ強なれハとも 一たさくこうほと 採彩及菓
蔬隨時恭敬與 提婆達多不
一たうざのぐちなり 弄 天廻雲鑒雲將霽唯是西行月
不遷 菅
一たけあめる垣 五架三間新草
堂石階松柱竹編墻 白氏文集
一たざのぐちなど 彈碁
後漢書梁冀能弾碁 和國にてハ云ぬ物也 河委
一たけかるさ たつざなれ心也 霧にそへたるも
一たまもちど 海邊にたよりする玉裳ハ後撰に見ゆる奇女の裳
米をかづけたり裳ハ女のさぬにそふ物也
一たうざいの此子ハ 太大臣の此女 鬢黒のいまうと也 菊香殿
女此と申此服に生れ給ふ也
一太上天皇に 弄 夜つゞ尼に成
給しかば皇太后ちどに成給べきなりしねバ也 河海本朝太上天皇ハ
持統より始る女帝也 薄雲の女院の号ハ持統の例なれ

花鳥 女院若ハ此位につき給ひて院に成ぬ小一条院などをバ太
上天皇のそ男とハ申給ふず但封戸年官年爵なども差
異もなされバなずしふ事とハ申給ふ也此封とハ封戸なり三ヶ所も
各千ヶ百戸なるを太上天皇にならずしへて二千戸給ひしかも
院司ハ女院がなれるまゝにさとる判官代主典代などや三宮ハ太
皇太后宮皇太后宮皇后宮

一たゝの鴻に明石上此綏也　一たひしかつら　類聚山がつ
ひしかつらまでもくゝ云々民氏河原ゝゝや ことひと同音せゝを
ひと云ゝがごとし河原ハ穢多　一玉かづら　やがて無論しんとなり
ちかんハ誓言道祖神も照覧あれども心ひくぞてぬと歌べし

一塔こぼちたる人も　昔女貞女ちりしがくらくてあれバ人
のうたがひもなきとて塔の壁をこぼちて燒あしくるとなり
丁こぼちたるともあるし河顔牧子がなすと云々花かつらの中納言
抽詞にあり丁こぼつや　弄畢竟志ほうなる女のなす歌べし

一竹とり　抽詞や梅壺方や　一瀬原　大宮寺にをらしぬと
や貞観十八年二月廿五日以滝瀬院為大宮寺棲霞寺にも
瀬原あり　一うすくも　うすきさ引ゆひ　襷サイ人の姿
と云一説にハ玉手袍とて玉をかざりてかくる也女ハかけ帯と云々

一大ぐのうち　西三条大臣良相公ハ閑院左大臣夜原冬嗣公
の子や大臣の息大学の名を習ひ木の例也

一大将内大臣にならずしひて　内大臣執政例源河内　忠義公兼通天
禄三十月廿七日内覧同十一月廿七日略て例あまたこゝ

一辰の日の業つゝしまりす　十一月丑日より始若丑二ツ日ハ
下の丑也。此上の丑ハ有例ハ丑日ハ葬歿矣又寅日ハ
節の心ニ。卯ノ日ハ童女出説。辰ノ日ハ五節の終の節會の日也。
辰の日の業つゝしまりす不審也。豊明節會ハ同中乃辰
日也。若ハ五節の初ハ打まきれて。其明ハてゝ出さるゝ
一たうだりのつきうかり　此治年宮年爵也
一大学の忌その日　進士注曰。可進受爵祿者也　聖武天皇
神龜年。始進士試帝王系圖進士及第例　此下詞略之　弄一勘
秀才ゝるかハいづれも進士と云也。必しもの中よりのかり
ねれ云付侍る也　一大夫のぐん河　大宰府一員ハ
帥權大弐小弐。大監二人小監二人。大典大小令史等あり。小弐叙爵之

時。小卿と云。監叙爵の時。大夫監と号す。大監ハ正六位下。小監
従六位。大監ハ正六位下相當官なれど。従五位下ニ叙しぬ
れも。大夫の監と稱しるなり
一大ひさ　大悲者　観音のこと也
一たゆさ　墮羸　史記をちぶれ　長根ニむすび付ゝるとハ根ニ音
一たゆしも引出けべきねる　長根ニむすび付ゝるとハ根ニ音
をなくことにあずらへて。ことぬ洞の洞ぐとゝきゝる也
一たきうらくそん　六日武徳殿騎射をてゝ打毬の事也。
唐人の狼来まして馬ニ乗て毬子ハ毬をじむるを打毬と云。其時
養する手紙。打毬手とハ云也。納蘋利も六日の競馬の日。雅楽
寮是を養也。膳員の乱声ハ必競馬ニ有る也

一たゝるゝゝる くゞのゝゝれも同ゝすや。倒(タウ)や。おれたる心也
一たてしゝ やるもゞや 一たゝめるに 今ハ[illegible]
ゆゝゝ此給ゝすや。かゞゝといふこゝ也
一たゝぬゝとひ 迷(レン)投(シ)ゝてあるゝ。何ゝして隔心(キヤクシン)あるぞと也
一たゝん(梅ノ[illegible]) のゝゝくゝ 給(ダン)ゝる 組(クミ)ゝるひもなり
一たゝやめの 嫋女(タヲヤメ) 雲ゐもうゝ人がゝに、父のまゝらんこ也
一太上天皇ゝなすゝふ 漢(カン)高祖(カウソ)の父太公(チヽタイコウ)を太上天皇ゝなし
給ゝすをおもへる也 日本ゝも例ゝしゝなるゝず
一たいしき(若上) 平字也 毎いしゝかゝもゝ
一たいきやうゝなずゝへて 中ゝ父の大饗(ニヤウ)にて年ゝゝゝゝ
ゞとゝ。此度(ゝび)の所賀(ガ)ゝさせ給とのゝすや 花鳥 正月二日二宮

大饗ノ事。西宮記(セイキウキニ)云。大納言白大掛(キネホウチキ)二乱(タヲリ)中納言同位一乱。參
議大掛一乱。非參議(ヒサンギ)四位柳色小掛。五位細長(ホソナカ)一連云ゝ略ゝ
一たしゝゝゝね 給(タエタル三子)荒澤也(シレザン) 一たゞらして(若下) 瞯(タル) 又爛(タル)
一たけゝちひとしき せいたけも同様なり。一説人也
一これ又(哥) 心ハ。得(ヨミ)ゝしれ松の神代をへたるゝを。源氏をとひ
給ゝがゝ心ゝ説ゝしゝて。又も聞(ヒ)べき人ハなきとや
一たゝむしのあそん ひもろぎ哥を。清浦袋(キヨスヅノフクロザウシ)菓子(タイフノフエ)平文時(キ)也
あり。ゝゞゝゝむしの哥の分(ブン)ゝてをくべし
一大ゞく 大曲(コウ)也 一立(哥)ゝひて(稲本) 心ハ我もしひゝゞ
海ゝさ海なれバ。稲本(キエ)の消給ゝゞ。ゝ燻(ケウリ)ゝ。女三も立ゝひてきゝん也。
それを燻(ケウリ)ゝゝべといふ給也 一たゝうな 箭(タカシナ)也

一たきぐろうさんぐん　提婆尼（ダイハホンニ）採薪（タキ）及菓蔬（ヒクラ）隨時（ヤク）恭敬（レアタ）与薪
さ多と紙荷（ニナヒ）て、蔬人の役（ヤク）にて、必参日（シヤフニヤウ）、夢明（ヨウ）にひきて、引道者
一たきぐろう　採菓（リヲ）汲水（ヲヒヒ）拾薪（キヲヒウク）設食（ヲ）　平時奉事經（フ）於子歳（ヲ）
子歳給ふすの如者、此身ならば久しく親（子ガフ）とや、今ハ紙をじめて
も、後（ノチ）の親を為也
一たしぬべき　たしぬべき身とう
けたり、上ハ佛へ職（ニウメツ）なれば、常在（ヂヤウ）灵鷲山（ヤウ）の心もあり、親我（ヒ）生（ニヤウ）
見ニ法仏世ニ恒（ツネニ）罪源妙典（ヲ）花ちる罪とハ剃（ヘウン）てへぐてなりしや
一玉しゐの源の魂（タマシヰ）このうちにとまらんとや
一竹川（ヲ竹川）の竹河の曲（キヨク）をうたひしなせりしと云也、竹川のうたひ
もれて詞、末（スエ）に、ゆるせめざしくりへてとあるゆへとあり
一竹河（ヲ）は　仏頂ゆしにもやく曲なひしをとゞめなるゞ、いかるかし

まか、又とゞまるを給ふんと早（ひ）下（げ）にや
一たちかしん　薫（カホル）出家あらば、家をたれまんと心なひしとや
一たゝ　糸紙くり基（ダイ）、神祇（ジンギ）令水捕（リヤウ）紙線（スイヨウ）柱（ヂン）と云ふ
一猿のやどり　晨鶏（シンケイ）并鳴（ヒヨウ）殘月沒（ホツシ）征馬（セイハ）連嘶（シキリニイハフテ）行人出（ツ）　白氏文集
一たうのそい　昔ハ法（ヨク）にて拜（ハイガ）賀者、今ハ禁中までや答拜（トウハイ）ハ
亭主（テイシユ）も南階（カイ）にくだりて返礼（ヘンレイ）ある心也、揖讓（イフジヨウ）の作法也、彰天納云
の詳賀ハ、薫ハ束帯（ソクタイ）、白れ直衣（ナヲシ）下がさねめづらしきれ
一大夫（うきゝ母）がりやれ　大夫がもとへと云詞也、がりハ許（ガリ）也
一大内記　或ハ（シキフノ）捕（セウ）ゑたり
すとも参（ミヤウ）べきと云詞也
一たけふのうふ　いつくにましま
一たいしやくもくしまふ　梵（ボン）天
帝釈（タイシヤク）ハ人名を引うきとり天也、帝尺（タイシヤク）ハ忉利（タウリ）天の主（アルジ）

一 奇 樓の 樓のまほふあるうち心してなくべきなるとなりむしを悪ぶ
洞にいひなしのみや
一 奇 脱ねして 脱ねしてこころを
ぬへ此心のうつりうつるぬはさて後に没定あれとなり
一 たけかちちかく 笛のしやうが紙和琴にうけしてひくを
一 玉にきす 玉 毛詩
一 たちとて 親ちどれ中なを
彫 ダン ゼツ 彫しるり抽をとゝ心治也
一 たまとれ 殯夜見葬礼記式
殯 モガリヤニフクハン 入棺しるり人を垂所也 殯夜にて 穎生しる事なり也
宇治のみこ 雛波のみこにあひなりて抽をのぬしるれ叶
べきれ
一 たにの折をなり 谷にあり家
の野ぎよりもや

れ

一 あうむ れうとて 源氏のかしれうとや
一 あし れいのどうなき どうてんなき心やれいは例也
一 うるうや れいにうるぐる月日かしのひら 令曰 陰陽寮頭一人
掌天文暦数風雲気色 謂天文者日月五星廿八宿也
暦数者計日月之度数而造暦授時也 気色者風
雲之気象也 言以五雲之色視其吉凶 候十二風気知
其妖祥 應和二年七月廿日 黒雲気廣三尺許起坤
亘艮 康和二年正月五日 白雲廣三尺許 経天亘東
西
一 れうしうなきんとて
寮試 花鳥 試には史記をよましむるやよくよみたる人を
擬文章生補とて次の詩に大学寮にて心とうる及第の人を

文章将業生に補す是を進士とも云り或は前にて勅訊をさ
れて試らるゝ事あり文章生に補してのちさしに方略の宣旨を蒙て課
試をさゞるゝ事あり云々 略

一れいのしんでん　こゝろ物あらをゆふ所なれば例といへり
一れいのこゝろに　こゝあげまれの額をいへり
一れうわう　陵王楽也
一れいをさせ給　毎月八日中堂
まてや

ろ

一ろねこ給　猜
一ろこゝの人　おほき心也　うらこゝおなじ文そこもとれるとも云
一ろぐくし　悪形也
一ろぐのし　そくなはなす也
一ろひがし　糀紙窓　横陳
元服の事も　そひがしに女系なるゝ
一ろこにこそ　足下花人をうしづく詞也
一ろも　柳也
一ろれしれぐやいづれを
中の事にて三の事をまけんとれ心也
一ろひかし　添臥也
一ろむかれ　宵也
一ろはつさ　側付也　うこゝの物ずきとして縦なりを横に
あらぬ事をいふ也
一ろれもじめれるゝ是より馬
双が音ありしこと紙云也　周縁と云也
一ろこはか　そこともあるき心也　ちりはそへたり詞也
一ろしきあけて　そくんは　そくめさあけて也
ろぐろりなる　ゆ　しけるゝさ心也

一そはなれば　たかかれたるや　一そむきぬる也　尼になりたる
と云也　世紙そむくに同し　一そぢめ　たるはしめなり
一その人とは　それともしらぬ人とたるを
一そとぶらの声　鳴ハ八月十五夜初て　渡也
一そよそれよなどと云詞也　一そや　初夜也
一そうづきん　琴也　源氏に上手也
一そぶや　さうどいふ詞也　源の出と云也
一袖くそ　さむき朝　手紙ぬさ出さぬ也　手をあらはむる也
一そくさねぬへら　とりさぢらさなどするなり也
一袖ぬるし　ここ夜を袖をぬらす家のゆかとしるに　れうとまし
きとれ心也　一そくろもしきまでなん

源の心のそろ直とれ心也　一そのたのハ　袖を作るべき　儒
者の進者のるす也　一袖ひへを取紙　舞の袖を
飜也　舞ハいづまともなし　一そしうなる袖のし　なろ
そかなる心也　胡にもつくぬものゝ中に上手など紙弱出ぬへ
なとも　針かぶむ心也　一袖ぐちなどこうかれなり
弄　踊奇の時の出しぎぬなどれどとくことさらめきたるなと
よろしかしずとも給也　袖ぐちとハすぐれの下よりも女房の
きぬの袖を出すとも　今の世にも大饗などれ　晴乃続
式のこれも　いぐしぎぬあるも
一そてぬるし　花　忘ぢとハ泥をひちといふまつきたる詞也　そ
袖ぬるしともいへり　田子もいやもさき人なり　さるへなどとりて

泥中にありたつ物よ此息所の我方せなかへ活也

一 袖の上の玉のくだけたるもなん　来勘

一 それをしたるかたれかと　こゝおげくしたる毛をれかとれたるとも

そしさくをこゝびたる也

と云也

一 うちはせうそこ　大我を帥

一 うちはすゝ我すりたるやうにて

うちやこゝや　帰来倚杖自歎息　俄頃風定雲墨色　杜詩

桂嶺瘴来雲似墨　洞庭春尽水如天　柳子厚詩

一 うひえてほそやかなるすがたゝ　俗にそびくとしたると云祈

一 うこそはそれこそはや

一 うびやき　涼の明石にては此せ

いとほそやざけるがいまはもれくしさとも

一 うれ人なしぬ　寛平遺誡云　今須公門之中令貢二人詮

此其子必令永貢　此なとがれはあれども又鬱にまいるし

とあり上下略之

一 うゑの鬱がい　語清六衛のを

けいかをいかべし　懐安　河北ニ妻　令日主鬱司　正一人掌調習鬱

大事鬱は仁徳天皇ノ云れ中ゝ高麗よりはたる　物は倶知こ

云しとや

一 ううまれはいまし先れ

義和なり　仁明天皇　侍従　友方なり　此秘蔵の事不傳男子と云制也

侍従黒方　二方

一 うれかうれ　前の何に蒔はこと

いとしてとあり然而大宮のなり　雲井所のおとなしき人に成活

ゝる心とあり

一 うむじや　号若大饗の時号

者と云ふ事ゝ別てと心得て二筵　唐朝法爵蓄の三の門一

あるをば号者といへり

一 ぞくれかるのかと　外典を云也

一 うれしさむさぬるさ　樂書曰。師文之變易寒暑。孫登之感動風雷。云々謂琴變也。琴書云。師曠晉之樂官也。工於琴能易寒暑。占風雨。爲晉平公。鼓之感玄鶴下降

一 うこどころどもなく　そこのところどもなきや

一 うほづる　雨の濕ふるや　一 うれもいとちかき　弄大納云

正三位。任陸奥出羽按察使。兼行右近衛大將。菅原朝臣保忠。兼平六年七月十四日薨。四十七。号八條大將。時平公一男。母朝風坐の元始。保忠此物語に時代ちしそれをばさてをさて。

然てきちくてるれすがをこる。世中にとりつきて此人

どおしむとこそ　一 うらをあゆむこそ代して

榮花物語云。院の女御の御葬送の夜。御車のしらに。院あゆみつゞ

うせあへり。人にしたすけられて。源氏も御引歩し

一 うれ比　八宮の度始て書出。故幼かの御時よりをあらはせり

一 ぶくひしり　東坡山谷などもこゝろ。髮の僧。在家の僧

ると詩にも作れり　一 うてふれし　中君を大君に

比して。形見とよそへ。狠ごめとは狠ともにとや。家人御出あらば。

狠ならぬ川ゆふ君とや　一 うれしらん人にし　好色乃事

者なれば。惡のうつりがをすいしあへり

一 うよそれ　盡士をうれりじなれども。志がるさしのことや

一 うくらう　賄賂財物紙送るや。此詞は礼物を出して。

官位にのぼる心にや　一 うれやまとことも　言れるや

一 うつりれしいのうへ　斑女園中秋扇賞　楚王臺上夜琴声

班女ハ後にすてられたる古事を、扇ハ不知して下句をはなち
てや、扇ハ心をとられたるとや、白扇とある前句にて此しのぶや

一そうぶ鳥の　可怜病雀半粒鷲人落蛸稚鶏三更唱曉
遊仙窟

一袖かれし　昔の人にもしぬに

まはひハあるやうなること、白ればらはせまくら

一そうひ　庵もあらぬや

一そゞろ　坐すぞろそゞろし

いづれも同心や

一そう　孫や　王孫丈夫監で

うひろくハ族や

一そまて　なしてま文殺とそや

心依不也。慈殺笑殺と侍るも皆大概殺の字なるべし

一そゝろも出るやうなる事　天運の事

一そハ心ある　それハそうあるや

一そひくしきろ色　人のなのちいさやうなるを云

つ

一つゆけさ　露けきや

一つれなさ　難面

一つき　集　日本記

一つ　鶴　ほどの人なる心もあり

一つらゝけう　うらゝけきと同心也　つらゝさ月

一つぼせんざい　清涼殿の東の小庭、月西の小庭に萩花を植也

一つれづれ　徒然や

一つゞく　あつまる心や　流ぞふとも

一つなぎ舟　泛若不繋舟　文選

一つぎく　次第くの心や

一つゞつえ　支頤　ちうづえや

一つきうね　官位也

一つえくいかれど　恥ある心也

一つるびきて　女ハ馬ひきぞくしてぞさればびきなりしなど

れ女をこゝきんとさひて、わざとのけひきて、よりけぬ淺也

一つゞきりうゝふ　つゞまうゝふ也、うゝひていは笛をふきくするや

一つれなき後　とりあへぬまで、鳥をそへていへるや、つれなき

をうゝしきもてぬとは、よりひの賢実なき由に、中将にきるせ

んとて、かくよめるや

一ついきう　無風情

一つさしろひ　実也

一つさめて　早朝のこゝ也

一つゞら切り　九折　松葉にをくてちらき物につゞら切り

一つさゞしう　方便　桜仙

一つゝきに、ころもだて　裳　綾

衣售　蒔絵　已上見延喜式

一つきもきぬ　心のやとは、子をとふ

心を下にふくめり

一つゝきうぞく　市女笠にきき

きぬをきて、中ゆひたるをいへり

一つきめし　秋除目也、号京官除目、春除目者、号縣召、

各拝仕ふ、寄召之、春者太政官庭、秋者於外記庭召御

之、仍稱官召　教隆　弄　八月也、其はあがるめし、秋はつきめし

といひりふるや

一月のもむ　雲ゐをかくてた禁

中れるにはあらず、中家れ出家しなて、忉利天上などれ是也、此

世れやとは、悪家のこゝ也

一つゝゆきかいきめ　時とし事

をあへしてよくたる哥などはよりれはすくなるべし、後まで書

とむなこゝろなきと、哭之いひしことなるを

一つゝふかき男のこ　秋家にあれば、仏理にうとれるや

一つくりゑ　秋色を云也、女どもたるゑ也、ゑどもたるゑ也

一月のかれのこまもしれ給　月顔似鏡無明罪　風気如刀不止

俄懇荒歌

一月日ひろまる　若葉

一つくづくと等ぢゐれば中略何也俗ていふところの心

もち　旅店等也

一つやうやうにいも虻　貪家浄

一つえれき　ところへうち新

一つくれの山を吹うち風も

甲斐ねばこし山うち　学陸か

一つのちもを　学則盖

一つまどろむのうち　不審の

一つくづくと等ぢゐれば中略何也俗ていふところの心

もち　旅店等也

掃地と東坡詩ともる

ねむ　貪

甲斐ねばこし山うち　学陸か

一つのちもを　学則盖

一つまどろむのうち　不審の

工道風い能書也

ねる　机をうちを付也うち

ゐるみ給ゆへのうちばかも

一つくづくと等ぢゐれば中略何也俗ていふところの心

もち　旅店等也

一つやうやうにいも虻　貪家浄

一つえれき　ところへうち新

一つくれの山を吹うち風も

れいうちうちとつうち

工道風い能書也

ねる　机をうちを付也うち

ゐるみ給ゆへのうちばかも

一つくづくと等ぢゐれば中略何也俗ていふところの心

もち　旅店等也

掃地と東坡詩ともる

ねむ　貪

甲斐ねばこし山うち　学陸か

一つのちもを　学則盖

一つまどろむのうち　不審の

一つつくづくと等ぢゐれば中略何也俗ていふところの心

て節会もの也　職

一つもろもろの　放鴻の等い待ちびへ　商量すること

ともろもろ也　ていふ

一つやも等つやいふれ

一つやも　真ちどや

一つまこものやうて　范文

て吐ぐそれも紙を　つ

言をそへていもんも

一つやうやうにいも虻　貪家浄

一つえれき　ところへうち新

一つくれの山を吹うち風も

一月日ひろまる　若葉

一つぐいもち　桜の等へうち

一つてるれて　花　和琴也大皷

一つくづくと等ぢゐれば中略何也俗ていふところの心

もち　旅店等也

掃地と東坡詩ともる

ねむ　貪

甲斐ねばこし山うち　学陸か

一つのちもを　学則盖

一つまどろむのうち　不審の

工道風い能書也

ねる　机をうちを付也うち

ゐるみ給ゆへのうちばかも

一つくづくと等ぢゐれば中略何也俗ていふところの心

もち　旅店等也

一つやうやうにいも虻　貪家浄

一つえれき　ところへうち新

一つくれの山を吹うち風も

甲斐ねばこし山うち　学陸か

一つのちもを　学則盖

一つまどろむのうち　不審の

一つつくづくと等ぢゐれば中略何也俗ていふところの心

て節会もの也　職

一つもろもろの　放鴻の等い待ちびへ　商量すること

ともろもろ也　ていふ

一つやも等つやいふれ

一つやも　真ちどや

一つまこものやうて　范文

て吐ぐそれも紙を　つ

言をそへていもんも

一月日ひろまる　若葉

一つぐいもち　桜の等へうち

一つてるれて　花　和琴也大皷

一つくづくと等ぢゐれば中略何也俗ていふところの心

もち　旅店等也

掃地と東坡詩ともる

ねむ　貪

甲斐ねばこし山うち　学陸か

一つのちもを　学則盖

一つまどろむのうち　不審の

工道風い能書也

ねる　机をうちを付也うち

ゐるみ給ゆへのうちばかも

一つくづくと等ぢゐれば中略何也俗ていふところの心

もち　旅店等也

一つやうやうにいも虻　貪家浄

一つえれき　ところへうち新

一つくれの山を吹うち風も

甲斐ねばこし山うち　学陸か

一つのちもを　学則盖

一つまどろむのうち　不審の

一つつくづくと等ぢゐれば中略何也俗ていふところの心

て節会もの也　職

一つもろもろの　放鴻の等い待ちびへ　商量すること

ともろもろ也　ていふ

一つやも等つやいふれ

一つやも　真ちどや

一つまこものやうて　范文

て吐ぐそれも紙を　つ

言をそへていもんも

一月日ひろまる　若葉

一つぐいもち　桜の等へうち

一つてるれて　花　和琴也大皷

あどはうらめをつゞみ紙もなれてとゆへり

一つゆやくもしぶろや　一つくも所　造物所　内裏仙洞ニ

一つゆきり　ふりきりや　一つねりす　不夢初着にさしが

らずと云がごとし　一つまりしき　弾指云

一つく所なし　彼仕大臣　恵雅をん所なしとや

一霧しげき薄の　此息所の心は虫の声に蛍の音をとゝへ事

いへり　夕ぎりの蛍の音が　指手にかゝらぬと云心也　花虫の声より

ふえの音を比すり　八雲此抄にもひかれ侍り　文選　長笛賦云

蜂聚蟻同　元音猥積云　一つぐゝなどしぬへば　嗄吐小兒

の乳をあまするや　一月がげはなるゞ　禁中も冷泉院

の月をおなじ乳なれば　深の花の枯ぢりかゝりたるを早下ぬべ

一つるぎ　黒文によれり志の流涼あり　撥忌の時の衣也

一つれくと　虫の声は蟬也　かゞとは人のなくにかゝろけにして也

一ついたちのことつねよりも　六条院拝礼のよし

一つゝかある　つゞが　恙也　虫の名也　含心臓と云

一つかれうへにも　史記曰　季札之弱使小過徐君　徐君好季札

劍口弗敢言　季札心知之　為使上国　束獻　還至徐　徐君已死於

是乃解其寶劍繫之　徐君冢樹而去　従者曰　徐君已死

尚誰予乎　季札曰　不然始我心已許之　豈以死倍吾心乎　呉

世家

と大志の哥にはしなり也　一つてにしし　毎よりすぐさぬ

一つまなり　猶也　一つりを　礼拝也

一月ふりはいむ　後撰第十六月を

うけうしと表といふはいひやとか人のまゝそれは引所別ニ書

一つきれ人まろく給　薫大将なれば、そのつきれ人とも、中将お将

などゝ、お大将につく人をよびて祿あるや

一つくも山を　浮舟はひたちの前司のまゝ子なれば、つくも山と

いへり　一つくもちじの夕月夜　萩の

うらば四月一日比とうきて、やがて、其前の詞は、七日の夕月夜と

あり、阿仏記にも、七日の月を一日比の夕月夜といへり

一月ことれ八日　茱萸の縁日也

ね

一女ハ　二位三位にいたり、后のつぎ也、常ハ上臈の北方などゝ云位也

一ねちけ　侍人ロきゝがましき紙云也

一ねたげに　ねたむ也、妬、ねたまずもねたむ也

一ねられ給ぬまゝに　中河までのゝり

一ねびねて　鼻のたゝらぬさ海也

一ねはこねき　いまたねてはこねどもとも、家にけまづりは藤

ツイをおぼし出て、まづりとのゝ人、第ハ根に寝をしへたり

一ねび人　年ハたりたる人也　一女別当　秋家ハ女別当を延

喜式にこそしたり、秋家別当也　一勘今ハ世にも院家、関白家

などに、お当の局とて　一念佛衆生摂取不捨　観

無量壽經也　一女房のさゝらひ　臺盤一事也

一ねさうなどし給　年三正五九月、六秋日也、天帝釈此月、

南州迦あふとこゝ兆星ニ　一子日　元日子日也、十節記曰、

正月子日登岳遥望四方得陰陽靜氣除憂惱之述

一ねきこと　称宜言ねがひ事也又神ないのかす

一子日あるに　賀の南日也正月の子の日本例多之

一ねうくと　ねまとすもしろをいふ花猫字の意めうや

ねうハ女言通するや

一女の后をあなやうあるまて

河　女条二条后の業平朝臣に通給しするなど云ふ後撰

云ことゝいできて後京極のこゝやを所にはかりしける元良のこゝ

此ノ孰れ

一ねちけたるこれを花若

君れ引出れこと後の給ハ私勝たる統なるべし　ねぢけたる

そ口きくがましこさ心也　今ハ好の名につきて　いひごとの習

なるべき心也　弄ねちけたるハよしねよしや　弟をくひたる

さ海也　今ハ好ひとハざれこと也

一ねん仏よりも　万事ノ家ニ生皆

捨離専心發願向西方

一ねのこれ餅　子ハ実の翌夜な

家に依て子のこの餅を惟光が云三日祝を子のこと云ふあるす

なし

一たすくと河　栗也やはしかや　或ハなるよびか同心れ仏なるよび

も繋字也

一たすぐらか　平也

一内侍のすけ　典侍尚侍掌侍　令嫂よりさ紀に此使し

たる人と心うべし

一たすさ人のすたる郡の出けん

揚貴妃のすを云ふ　方士ハ既に貴妃にあひて　かんざしな

をてくるか　玄宗にこせたるか　是ハかんざしぐらりまて　更衣にハ

令嫂にあハざれバ　ぐくの給也

一中ろ　くりてと云心也　世俗に

云中ゟまでハなし
一なまめかしう　寂媚(ナマメク)　生花(ナマメク)
なまめくニ二の心あり。嬌(ナマメク)るを云。女郎(ヲミナメシ)花の形の心也。又生の
字をなまめくと云ハわかわかしくうるはしき心也
一なずらひ　よそふる心也　　一なづさひ　なれむつる心也
一なめし　無礼(ブレイ)
一昵近(ナツキン)(ナツサヒ)
一なすらへしうら切りてずらうし路　長橋(ナカハシ)ら清涼殿(セイリヤウデン)より
紫宸殿(シシンデン)へかよふ廊(ラウ)也。此所ハ東の庭(ニハ)よりおのりの階(キザハシ)あり。此
橋(ハシ)らわたりて。殿上へ向(ムカヒ)て舞踏(ブタウ)しあふ也。礼儀(レイギ)也
一なまさひ　並(ナラビ)也。又やりくる也　　一なまくれ　何やかやの礼儀也
なま代人の心ちめ　是ハ縁(エン)姓(シヤウ)うつろふ人なれども。
云つるに喚るをつかふ。並人(ナラビヒト)　詠光史

一なまめく　花　なまめく花ハ。わかわかしきうつくしき心
一なまつ　うんぬんともいふべし　一なすら　うんぬんといふべし。ふ
なぐさと云所をも云也　　一なずらへしずらう　なずらしさも
べし。並衣(ナラビ)也。さしぬきを紋略(リヤク)してなずらうる也。蛭別(ヒルベツ)を
さしぬきまなざしとそへてなさもなれなすも
一なまうらやりくるる也　　一なれめよ　大方まこと云心也十
かなしめるすも　　一なまよ世のあらさ也　何やかや
と云心也。又なだけがたと云心さも　一なまびや　わるる心也
一なまよ人のくろく　媚心(サイコロ)　一なまぐし　右馬(ムマノカミ)なぐるす。趣る何
りい人のすもなれ何かし。紙るすもと云。索るる也
一なそうこと(?)り　何すりと云心也。又なそうつく　なまさなど

云ハ艶ずべきすりちきやなどいふべし
一 なすび禅うちうちかさち 内裏ちきた左大臣殿の御家人かる
ちらちせ也これはまつちまなじきや二条院も大内ちち河ら
の方也天一神をいくち中神ハ中央の神也長神ハ安鎮也
一 中川のちくち 今此京極川也
一 なげしのちを 座敷より下也ちさきあるともなげしと云也
一 なすくけ ちすくらもむれうち也ちれなかる行也
一 なうくらしを あらくにあきかられ心也
一 なすめうち これおもふ心のさ海也
一 なすきうわんうくへまいそ ひらくへまいねのさたうちなさ也
ほけよ不分明とみくち 一 をまいりしろま うしろへのけ

てむがけあくちろや
あ紙さかさ同心
さけいられもあげやをさ海の心也
一 なす紙くちく られつあや
一 なすげのかぞいひ あげの向
一 なすちひハ 農也つかられす 一 おすもたうらい 金剛蔵王権
現ハ過去釈迦現在観音当来弥勒也 弥勒出世の時地に
ちるべき金を海より結神也 一 なすよがしの院 きんじやう
きこあどいくかに心也河原院のあや
一 なすいめん 花実一割に内證時のかさを養そそれのちち
院のみづめんあり名倡といふ若きなどのあせうゆたさが
いは名をさちれてあゆうすや此次に潮口れこのありきさとを
一 南殿のせよ 世継云貞信公のす武徳殿の松原を貞信公きを

まゐ時毛の生ころまゐて太刀を取て引とぶむ勅使なりと
のゝ人ハ刈まるつとや
なしぬ心や
念比なしぬるを云や
給ひしを出給ふや いづれの世ゆゑ来世のゝや
一なまかしの御教 発恩御教号小山御教見栄花物語
一なまかしのゝけ 冨士に射してゐへバ浅弓ぬけとや
一なまけなき人になりゆゑ 成人せバの心や
一なまもげとぶに いろはや古今の序にまゐふ人の和とる
一なぐらなれめたすゝとぶに 打まじまゐ海もざるをかん
源氏の心に 花つが ハなをざりなるまゐまじまゐ給ひて ずぐ

れたる所ぞとあつ先のふ心ぞ
一なぞしこ代えらぶるもしぬをなきこうに なぞしこ
ハ玉かづられるをもさこうハ劫や つむる心や人のいたむべき心
や 碁のこうも同心や
ちれれまとや
とりしとや 大宿といへり 女房の学文をし 又舞なぐなる
ふ所といへり 今 おほとのゐといふ所ハむりしこ法とや
一内侍所 これをふるさ女房どもれあり所や 内裏に天照大
神まします所や
とごせのおもてのやう如べし 一なぐらなるうくろきうちさ
雲のふるさをもれバ波にくろきいろになるや

一なをしもうしうへ　表裏同様の濃也。是も旧儀也。花上に
いへる今やうなれハ、きぬをいふなるを、これなるをしハ今やうなれ
ら表同様なるをいふなり
よりのなり也。天武天皇十年正月七日、御尚女殿宴
一なやふとて　追儺。十二月晦日、除夜に儺を追事也。鬼や
らひと云。追の字をやふとよむ也。儺の字をなまやらひとよ
むや。始自禁中追諸家
玉葉には落花形鴛通夫など名を抱きしや石葉などなり也
一名ゝうきれおひ　音れ名あり
一内えんなど　正二三月中に清涼殿にて文人をめして詩を
作て講ぜらるゝあり。主上并執柄赤色袍を着し、保元
信西ト行て後ハ絵なるなり也

一なすれはそをれ　十の絵を巾に用中れをと云。是ハ一より七まで
ふと云。八九十迄中の絵と為巾をはそをと云也。妙音院の流に
ハ一より四すぢつゝふと云也。中のをくバちごはそくするや。大方中
に細きをと一心得秘説也
一なすくしバかゞとや　内侍と中将
どれ中絵バかゝろと云おしやとて常をもをてこぬとやかゞと
ハうろや。常のうこにはをくり。師説勾也
一南殿の様のえん　南殿様のえん。是ハ花宴の夏。先例多
之。南殿ハ紫震殿也。茲宴例。淺瀬弘仁三。於神泉苑有花
宴事是初也。南殿茲宴例。村上康保二三。於南殿有茲
宴云々。時探韵例。延長四年二月ホ例也。又茲宴有辞不
うゝ例。天暦三。三十二。右うゝ地下。辞人ばかりにて堂上の辞

一なすけさうびは　ゐれ出(いで)めうを
むもひごもうすい吉備(きび)公(こう)爲(ため)うて下(くだ)べのつま
哥(うた)を三反(べん)頌(しょう)て陽(やう)乃(だ)うすやゐいうの
一夜(よ)のれうを　本妻(ほんさい)ハ服(ぶく)も三月也(なり)深(ふか)い更衣(こうい)ゟ始(はじ)まり
をもいくこゝろやうゟ心(こゝろ)ざし浅(あさ)深(ふか)ようべきうゟ
ひもゝゟ扨(さて)ゟをい夜(よ)のひれ摸(も)ゝうこゝろうて
さゝべ　寝(ね)所(ど)ハ紅(くれない)の絹(きぬ)を用(もち)ゐ定(さだ)まり白(しろ)木(き)の時(とき)周公旦(しうこうたん)東(とう)都(と)へ入給(いりたまふ)事(こと)を
一なすけ面風(めんぷう)やまず　花(くわ)周成王(しうせいわう)の
引(ひき)ゟ在(あり)而書(しかして)

一なすけあゝ　ゐれ出(いで)めうを
一なすけさうび　ゐれ出(いで)めうを
むもひごもうすい吉備(きび)公(こう)爲(ため)うて下(くだ)べのつま
哥(うた)を三反(べん)頌(しょう)て陽(やう)乃(だ)うすやゐいうの
一夜(よ)のれうを　本妻(ほんさい)ハ服(ぶく)も三月也(なり)深(ふか)い更衣(こうい)ゟ始(はじ)まり
をもいくこゝろやうゟ心(こゝろ)ざし浅(あさ)深(ふか)ようべきうゟ
ひもゝゟ扨(さて)ゟをい夜(よ)のひれ摸(も)ゝうこゝろうて
さゝべ　寝(ね)所(ど)ハ紅(くれない)の絹(きぬ)を用(もち)ゐ定(さだ)まり白(しろ)木(き)の時(とき)周公旦(しうこうたん)東(とう)都(と)へ入給(いりたまふ)事(こと)を
一なすけ面風(めんぷう)やまず　花(くわ)周成王(しうせいわう)の
引(ひき)ゟ在(あり)而書(しかして)

心得(こゝろえ)ゟこう　法(はう)ゟ万葉哥(まんようか)を本哥(ほんか)ゝてゝゟ吟(ぎん)べし
一内大臣(ないだいじん)ゟ始(はじ)め　花大納言(くわだいなごん)
能(よく)ゝゟ　ゐ大臣(だいじん)ゟ　ゐ納言(なごん)ゟ
数(かず)ゟまゐて　四(よ)ゟ始(はじ)めり　花(くわ)内大臣(ないだいじん)ゟ次(つぎ)
始(はじ)めくゟ　ゐ大納言(だいなごん)ゟ　ゐ納言(なごん)ゟ内大臣(ないだいじん)ゟ次(つぎ)
ぞ　按察使(あぜち)ゟべき定(さだ)あれども　ゐ大納言(だいなごん)ゟ
大臣(だいじん)ゟ　ゐ納言(なごん)ゟ　弄(ろう)　数(かず)ゟ　一(いち)内大臣(ないだいじん)ゟ
のうや　依(よ)ゟ爵(しゃく)　古(こ)のかゝ　内大臣(ないだいじん)ゟ
一なすけをゟい　ゐ門(もん)佐(すけ)ゟあ　内大臣(ないだいじん)の官(くわん)をゟゝ心(こゝろ)ゟ
労(らう)古大臣(こだいじん)なれども　未(いまだ)ゟ大政大臣(だいじやうだいじん)ゟ成(なら)ぬべきや
一なすけをれもゝゝ　花代始(はなだいはじ)ゟ八十嶋条(やそしまでう)ハ雑波(ざつぱ)ゟ典侍(ないしのすけ)
の人(ひと)ゟ衣(い)をゟて参(まゐ)ゝて解除(げぢよ)ゟるゟこれ雑

波のうへの例や

一七瀬　七瀬のこそぎ今の世に
も毎月ぞこと也。是所の七瀬、是所の七瀬と云ふ事在て、京中
にあるハ諸国をよせたる心也　種　賀茂　鳴澍　飛鳥　難波　志
賀　鈴鹿　山城也

一七日の御ゆるしび　弄　年始乃
礼のうや。或ハ七日ならぬに糸給人もあるべし

一弄　なべて世のあれ　世界のすぐらにとひ給ても男女のまじ
りなをじと。妻院に成ぬべ。今もちかひしるを神のいさめ給
ちんとの心也

一なりたし　風俗鳴高　なり
たしや。なりたしや。大家のちくてなりたし。おもれのなり
たし　一語　をとなせそや。をとなせそ　二語　あかん海こんともや
みそなれ　三語　或大家と号　弄　不詳也　詞ぐらなるべし

一なりさうじを　中の方の障子也

一なをしなど気ゆるされて　此節など直衣をゆるさるゝす
ゆるに。宇治左符記。妙音院相國ハ雲衣をゆるされずして
無二糸門一ぞや　弄　六位禁気丸云々気ゆるされてハ詞のぶらや。
たゞなし　ゆるさるや　一禄　此説

一なれこのうへ　をとらいの中の兄ミ云也

一なれあやに　柳無二気力一枝先勤池有二波文一氷尽開

一なでしこのほそなが　なでしこハおもて紅梅うら香也。此比
の花も卯花がされなを云ふや

一弄　なくこ忍もきてぬ　蛍のおもひぐる人のいひけりハ
洗ぎとや

一なてしこのけぞの気しうる

若柴の多ハなてしこの柴にかゝるゞ唐衣や。然ハ薄萌黄
と河海にいへる和遠なし
一なすこそあれなをくしさハ
かゝる衣神や
一夜の月なさほどハ細夜のう
ちも深しなれバ秋といひ秋の中もあつさ時ハ夜といふ心也
一なすこそ名に立也
一なすがうゝ長哥也長哥短哥
のゝ家々の口侍様々に出るも然も三十一字の哥を短哥と心うべし
一内侍の名の内家づゝ条内なくても内侍の官をアうゝるすれ
一内侍所にとおほゆる此にて内侍司の中に尚侍典侍掌侍女孺
此四寺の官也霜月にハ女官也内侍のゝこの内にもへ来つどふ也
一哥なすこそ紫ハそいふさせバなとよくなるゆへ也
一哥なすがうすり うゝかゝ人うゝかゝハしゞらくなどの義也

一哥なすがうゝハ中によそくなるよりも来てこどく後ハと也
一哥なすこそや惟光女にとく後てあふひと云名も忌所とも
一哥なれこそこそ まし水ハ志 清水也
一哥なすさ人の八雲抄云此ゝ水をいさしゐの水と云ゝ小井也いさゝ
小河と云も老ゆるなどの浅てなるゝと云也
一若上なすこそ人のなるゝひまてゞに 若 易常の人のよ
てゞにおもつかくおほゆるにまして上臈などのるゝハいふ及
どぬるや云ゝ
一内親王 哥 問云 女家も親王室
下なすこそ号するゝや 一歌合 一なすこそ
殘雪衙鼓夢前未有塵 庚楊ノ姚ヲ白系天 子城ハ小方城衙鼓も
云るゝなどの事のつゝしや人の来ぬ不通号ちりもなさや

一せうちかひを 源の心ハ天下安民の為を隣つり維の雲をそてハあられ
もいちちやましきなりと紅の漢書ハ心のふるれハへくつり
やうなりとや
一たえちくり 朽 編流
一たいけう 内教なり
一まんちうりまさも 此意を拍
あまねへなるまゝの給らく云しめせども心や。南天の如く奇なる
如くなるれどいひし紹せ
一かなのめん 名對面序文行絡
養小山枝ニ六府次弟將下一貫近清洗せ殺米内とらが家司兼中や
將着ニ幕ト臣下弟ノ舞の入宿ス後。王卿名對面。宮司野流洗兼不斷ニ行
薪菓ノ饗座 名捐ハ行絡の時そ
一たかうくも 床を鷹のさとなる
くせのへり
一たやしもん なやふまおもだ
一竹川
たのそもぞ 何としうすぞとや。ワさきあ恥て辞しる心也

一中やらり 南都下向人宮路を中やどるとられ
一たうろもやち 史記ニ日孝恵帝崩太后哭泣不下呂后本紀
一あけまれ たまうしの念仏 不斷ノ念仏なるべし
一たまむちうとさ 涅槃經 阿含經ニ説ニ同文諸行無常是生滅法生滅ノ已寂滅為楽 雪山童子求法夜叉飢ゆる人を身をあて
へて法を学ひてそ石くたる書付ぬてら鬼ハ帝尺童子ハ尺迦や
一さくらひ たうしれハ月ハ山より出て山よ入物あれバもろく紙もより来
いふらんされ心也
一やらりま たまゐしれ 両宮左右に有之子
あれバ宮あるねとともみてとてる両宮左大臣庭前霊物降居樹上ニ
詫前ニ據小兒ニ號此ノ詩花開落ノ詩ヲ作ル者之なき盡字兼請琵琶授秘手曲ニ
小兒醒 廉ニ義武ら呉や授流泉曲ヲ
一たもし 抱とり 抱 贈呂式ハ

京官の除目以後、執筆並抱をし行也、或除目以後毎三月經て
もあり、たゞ夜除目參差事也、此抱と云ふ也
一なかうど　中びとゝかれまでも書牛にあらず去ちかうど也
一なをしきて　武官ハ此　一なをしの筆　あ紙筆が紅ようつかてまびいろにかゝひたる筆にぬたるを
一なすがこゝろを　三十ケ日の微に觸也
一中に付いて　大底四時心想苦、就中腸斷是秋天　白氏文集
一なとくねるまし所に　稼穡窟に如ひとひくをさして云更
一なまかし　僧都　横川直心院　源信僧都に比せるを
一なまかそれえんに　法花經に仏ゝ稼穡縁起云ゝ
源氏目楽巻第四

ら

一らうたげ　いとをしきなどれ心也、かめたる心也、かけくとしたる也
一らうたう　労ある　いたもの心ある
一らうがたしき　らうぎさある心也
一らうのる　廊下也　一られへうし　羅表紙也
一らうくじう　良ゝおつしき也、おほどうにやもしきたる心
上らうしき方によれる　一らうをめぐれる　繞廊紫板架
交砌紅葉欄　白氏文集　一らんさう　乱声　らさうと
かさたるかなもあるとらんさうと云　讃
一らまれ筆のらんの筆也、假名にハむとよと用也、紫苑、さ用ふ也
一らてん　螺鈿、かいはすりてつけたる也、俗書貝といふ是也

一らいしとも　菓子などいふ物也。墨子　楔子。ころつきれ上にふ
ちをとりくしたる物也
一らうげ　老気也
一らうし給　紙ずりや　まやうと
一らうろう　宰鶴

む

一むねあくまじ　むねのふさうかたるを云也
一むりしれかたこまるぞうへて　文衣の在世れごとく。源をつれて
糸内志ぬへとや
一むつび　むつましくすると云也
一むかん親王の外せきれとせるれ　親王ハ一不より四不まりで
ハ有不也。如不にあたるをば如不といふまず。無不といふや。外をき
も母方れ親熟を外戚と云。外孫の心なり

一むしびつる　源氏と蓂の上の堅りを云。こゝきは紫ハ元服の時
のもとゆひの文也。おせしハ文のかりしぞいと源の心かりしぞいとや
男女のもとゆひ紫の糸にてむすぶゆへなり
一むつれ　むつましきや
一むけに　無下
一むつごと　むつましきことや。親云
一むしのひにきをへる　夕がれの泪にあしそふぬべし
一むさい　老気なきとれ云
一むべくしく　宜く愛也
一むくつけき　おそろしき心也　蠢　貪　白氏
一むつかて　しきりれ
一むつかて　しきりれつぶる
を云也
一むべ　げにや
一むざんに　無盡
一むねくしかしぬ　家のむね

よりてつかさどる家をもしかいふ
一むろ　そんへんこと　三棟（ムネ）の木或（アル）はよろひ
三棟の木いはゆるもちゐるや　一むろ　貧（ヒン）
一むろ　物乞（ヒン）ふ　寛平法皇　河（カハ）原院（ヰン）これ極の時（トキ）　魅（モロ）
雲（ミヤス）まで　鬼（オニ）ありて　夜（ヨ）ごとに　通（カヨ）ひ　来（キ）ける
こと　心のやべ　消（キエ）うせにけりとかや
一むろの戸　室（むろ）の戸
一むろ　物（もの）こと　うつほの
仲忠（なかただ）　十（とを）六（むつ）にて　父母（ちちはは）をうしなひて　おぢ
うへ　おとにも　あまた　声（こゑ）をも　彼（かの）　琴（こと）を
一むろ　これの　ごとひ　をそれ　出（いで）たり
人（ひと）　ぞ　ふ
おこそ　もの　物（もの）　大（おほ）
一むろ　ものこと　うつほの
ふるごと　いにしへ　ことば
とあだ　一物（ひとつもの）の　芸（げい）をも　みがき　出（いだ）したる
ていの　各（おのおの）を　求（もとめ）　来（こ）　畢（をは）　日（ひ）　ていこと
して　京（みやこ）　風俗（ふうぞく）　別（べつ）の　ごと　求（もとめ）
の山のこと　云（いふ）こと　物（もの）　ひと　こと　云（いふ）　心（こころ）　三笠（みかさ）の
かすがまうで　出（いで）　へ　ひと　ひと　の　ごと　いひ
まねぶ　こと　ふ
一むろんの　ほそもの　織（おり）
物（もの）　物（もの）　よい　面（おもて）　すく　裏（うら）　こと
ふもと　花（はな）　ぬまて　ふる　こと　ふ
一むろ　場（ば）の　ごと　花（はな）　ぬ　ごと

一むろ　ふるごと　いにしへ　ことば
とあだ　一物の芸をも　みがき出したる
ていの　各を　求　来　畢　日　ていこと
して　京　風俗の　別の　ごと　求
の山のこと　云こと　物　ひと　こと　云心　三笠の
かすがまうで　出　へ　ひと　ひと　の　ごと　いひ
まねぶ　こと　ふ
一むろんの　ほそもの　織
物　物　よい　面　すく　裏　こと
ふもと　花　ぬまて　ふる　こと　ふ
一むろ　場の　ごと　花　ぬ　ごと

五月の騎射の時、中ヶ将の着座する所也。賀茂祭、大内の時も、
小の陣をそ〻、一条を取へとそるによて、左を乙殿の程をいる
物也

一むらさ紀のこまぐめなる　紫のこ
びなまりよりしるや

一むもんのうへのれぞ　異無故乃
袍は夜穀冬平絹、色はつゆれ袍のくとし。問云無文の冠其
指如何　一答　冠無文巻縁服者は無文の羅を用也

一むかひもう　當服くるや

一むもんのれちなし　今源氏
無変位人也仍恵也

一むまやれおさにくしらしする
何　菅蓋相ひの外にはくしへくるか給ふる時、もち夜の明石のむま
なまらまり給けるに、むまやのおさいらじくしへるなり紀をはらん
してけくわめへる　驛長奠鷲時変敗、一葉一落是春秋

くしといは口詩也。抱まを出つけどして、口まいふ詩也。只今文節に
哥などはかりし給ひ、驛長に菅丞相の詩を作さるをられるに
なずらへるや

一むしれかしこき人ぞに流人
の例くるるは菅家を初てなければとも也

一むらく　無法

一むしれくめしをなくにも
史記曰、大名ニ下久不居、後漢書曰、位尊身危、賊多命殆。
文選曰、木秀於林風必摧ニ、行高於衆人必非之　運命論

一むし母君のれおぢ中務宮　醍醐御子、中務宮兼明親王出座
在大井川、此親王を明石の上の母君の祖父といへり

一梅のおり枝にふ鳥とびちがひ、かしめきさるさうきうれん。白き
うきもんのやうに抱ふ。こきうちれを重くるや。これと云いこむ紀也

こゝ紫のうちくろハ光氣あわてうつくしきや。きを白に重ゝ
れバけたゝくミゆべきや　一むらさ紀のゆへ　むかづしハ深のれ
むすめとや紫の一もとゆへの心也　一むねにまをきたろ　おどろきて
取こうろや　一むかひ火にくわて　人の腹立に
我も腹立るや　日本記　日本武尊東夷をうわし時堅に火を付
たるに。あるたゝりも火を付るもや
一むかし抱がたり　任者の抽代のす。皮嫡女をバ父ハ惡にしたひしゝ
ど。純母のいひしまよりて。をろかに成るもや
一むかしのあるがしがたり　後撰云大納言國理朝臣の家に侍
ける女に平定文いと思ひてかたらひ侍て。行末まで契り侍り
けり比ハ女俄に贈太政大臣にむかへられて侍にされバ略て此もや

一むらさ紀にかゞとハ　かゝとハかけんとハ紫のゆかりと云ゝこつけゞと
成べし。松より出てとハ松より咲こす茲なれバや。松を侍にしたるも
一むかし此例をあらためて　茲あらためての詞に政不改此二の心也。
源氏ハ此君太政大臣なれバそれにあらためて院司など補をし
れたる心也。又諫に太上天皇の昔此例をあらためずして。院司か
ミ定られたる心もあるや　一むらさ紀の雲に　慶雲書
星とて。天下一統赤陽にこゆるもや
一むかしもやうなるこゝろハ　是ハ嵯峨天皇此女に成たう
しろとをえらひて。忠仁公を聟にしたるをいへり
一むこの大君　舊書の聟といたんとすれバ太上皇也。又太上
皇といたんとすれバ。又后下の聟のあつかひなりといふ心也

一むかし物がたりにも。物さびしさを。花七大寺詣るなどに
は誦経物。切経読を施入されしなどを引也
一むかしの世にと　年ごろよりはめでたきされるや
一ひさしき物か　先ニ死人の湯にまいりて後はむかへ湯に
宣旨まいるや光明石上のまいりゐへるべし
一むまさひ　馬さひは前時中宮ほどの者と云々
一むかし人はあはれをあはれむ　糸書ニ云。琴ハ動天地感
鬼神ヲ云々
一むしんの女房　無心
一むかしの世にもあるやは　伊勢物語ニ業平の二条后をぬすみて
出さらしするや
一むかし物がたりにも　さかき兵橋
おとされすべし
一無言太子　涅槃経ニ無言太子波羅
奈王ノ太子。名体魄。容端正。生而十三年不言云
一むすびそく　舟をきざみたるを法花経に咲く中にさえ
ドとある
あるとき云心
一むかしくさすさ　経にされむ
一むかし物がたり　うつほの物語に
とうげんむすめれず独みて琴ハしを今あきこいふ人ニて
一むかし物語ゆかしくをもつて
しるすあるを
ま　漢武帝以董仲君李夫人良作以温石
一むかし別をかなしひてかそねを　観音勢至周位の者人也
子にておりしましけるに継母の為にころされければこれお
やのかぞねをしひおけて仏道に入給や
一むかしは　生田川の古事。女人ニて二死亢　大和物がたりにあ

一むかしはなこなるひとし　或説云昔深夜后皇后はなやこの時金
峯山より久終録行者来て加持しまゐる平愈の後本山に論て
年来の行業を廻向して鬼となれり絹青鬼と云常に后
をまづらりしなける紙智證大師ねんごろに教誡し給ひれど
絹青鬼もだらる事あわて言座にありながら灰のやうに成て
きえにけり其後后本のぬに成給ひにけり云々答ね云此記にこゝしたり
一むかしまれたりのうち　住吉もれだりに似たるものを

う

一うへ人　殿上人也雲客と云も同し大納言中納言よりうへの人也
一うちさしきるおりく　毎夜昇殿を云也
一うちとしけるどれくらしこゝにおやしきわざ代して

打渡しける橋也渡殿のきりめんだうに板をおきまはしてり
ふをいへり若　村上の御時宣耀殿の女御と殿壺の中宮と御物
ねたみのあしにそれはうるぐの人うかしこれこちに不浄を
まれちらし給ひすをいへり　さて御送りむ人のまさぬのを
そこへだしといへり
一うへつぼ　對屋ならで殿上
ま屋と給を云也又中宮まうのかしを給ひ清涼殿の二間
を上の御屋にしつらふ也ひの御されたるもとれ二間を上の屋と
ハ中なるを
一四ひるを　四畫衣也此物紙に四
とまゝハ大きく四畫衣のるや所によりてそれ殿の四のるもあるや
一うしろめたう河　影護心もとなきこゝ心也
一うなりしうきれいなり心也　簾の字也

一右近のつかさ　禁中にて寅の一剋より左を宿直を始て夜の
まて子まで行ふ也。さて右ハ丑の一剋より宿直をとる
してあかつきまで也。されハ右近の丑の剋を始めとして、右近の
宿ハ丑寅まで夜行也
じとや

一うけひくまじき　承引すま
じきや

一うらぞ始めべき　深をおもふ
ためならバ、よろづの人の始まりとや。又うらひて行ふていわれず
始めべきとや

一宇多の御門のいましめ
寛平ノ遺誡ニ曰、外蕃之人必可召見者ハ、在簾中ニ見之ヲ、不可直對
なて河海にハ家の御本文と遠と云て、若此の字ハあらずして叶
まじき時の事也。然ハ行まはしてめすまじきいてらう云
ふ

一うれふる　うれへ也

一うけもちて　諸愛咄　おほ歯の心

一うへの命婦　内命婦外命婦とて有。内裏に伺候する女を内命婦
といひ、それを五位の命婦と云也。外命婦ハ五位下の妻をいふなと云也

一うちまのことひとよう　内裏のことをおもふ心也

一うちつけ　やがてさしあたる心也

一うめきころ　気をあらわし給也。又詠をまつと云。取まはるべし

一うけハまれ　器量の人といふ事也

一うなづき　海の色也　河海類

一うけるる　人の心のうちをもいふと云。又見えくまなくとよぶ
ものも云也。月のうつりハかはるとや。又月の気のやどりをも云也

一うつすぐ　納言る心也

一うとき人　外の人　他人也

一うちさく　うらじと也。又うちさわぐをもいふ事なるべし

一うしろめたき　何心もなき時を云也。うしろめたくと同し。心得べき也

一うちかはす（季）　嵐吹など木の葉たる花の咲ちらしたる也

一うねうね　卯辛（コト）ありや　一うそうそ　うそ也

一うらうらせん　久しや。うしなふ紙折（ツツ）也

一うれしく（うれしさ）　うれしくも。うれしさと同し

一うつせみの（季）　力なくてとはせられぬ身をかけるが。力をふとるか

蛻（セイ・モヌケ）や人がらも蝉（セミ）のからなるぞ

一うつせみの（季）　伊勢集に。此世の外に見えぬせみなれど。蝉（セミ）の云

ぬけがらの家のごとく。末のびくる袖をぬらすと云心也

一うすきぬ（季）（タヾ）　優婆塞（ウハソク）は俗なから仏弟子に入也。南無当来導師（タウライドウシ）

師とおがむ声とあるぞ。五十六億七千万歳（サイ）して弥勒（ミロク）の出世（シユツセ）

までのちぎりをかけて云也　一うえむしろ　あさき人を延（ムシロ）にて

つゞる外（ホカ）へうつさぬ也。俗（ゾク）にうへむしろと云に同しきれ

一うちふしぬるか　夕がほと源氏と衣を手向（タムケ）きく

ある事なり也

一うたゝね　夕がほめ見えたれ娘（ムスメ）也

一うつせみの世　むなしき世也

母も有る歩かぬるや

一うどんげ（季）　優曇（ウドンゲ）華はあひがたき事也

一うちすてゝおかむ　花のうれしさ身にしみる所也

一うへしたなる　うへは花うへと見えける所也

一うちかさ（東つむ）　御（ウチ）大小あり。御家（ウチキ）一の人或はあるじ装束の折

ぬのにて表（ウハ）着とする小御（コウチキ）をきる。寸（スン）法（ポウ）は洗濯（センダク）にいるゝ所は衣

めくるなり也

一うけもちける　呪咀（ジユソ）しのろふ

すをいへり
とさるぐらうつしとりたるや
つるぐらりふ(ジヤウキ)気をしや
さ海や
とはつるまいひたれど女蔵人は 蔵 宋女(ウチメ)よりもあるまたる女官や
一うんめいてん 蔵 是は中の宮(ヘ)の東の方にある殿(デン)にて問侍
所のまします所や
一うつし心 現心(ウツヽコロ)や
一うさ男(哥蔵のこん)せる さしながら菓(ハラ)の原までも鶏(タツチ)のぐさるまゐるに名の
ましのへとあるは名のこずは鶏まじきまやとかたらるや
一うれしき抱かる それ人の声とはさくなるをうれしき抱かる
いまだ勝月(オホロ)とうしうまさらぬ心をかくめると

一うれしとりぬへる 源氏の名
一うれしふ心ちさて 源の名へう
一うちふくさ びんかき給はぬ
一うね人女蔵人 蔵 宋女(ウチメ)女蔵人
一うさ男(ハラ)せる さしながら菓(ハラ)の原までも鶏(タツチ)のぐさるまゐるに名の
ましのへとあるは名のこずは鶏まじきまやとかたらるや
一うれしき抱かる それ人の声とはさくなるをうれしき抱かる
いまだ勝月(オホロ)とうしうまさらぬ心をかくめると

一あかひ
うさもんのうへのさ海 蔵 今案、童女(ドウ)は晴(ハレ)の時も打袴(ウチハカマ)のよう
衣袴(ウヘノバカマ)をさるうさもんは窠霰(クハンニアラレ)や よれつ子にはよれ袴(ハカマ)をだきぎ
打袴とはいつひきれ袴(ハカマ)や
離宮(リキウ)や 仁明(ニンミヤウ)天皇に変分(ショブン)しなし給
一うんまん院 河雲林院(ウンリンサン)は源和(ジニンワ)の
一うれしさ海にて うつし心まことの心や うつし心ならぬは狂乱(キヤウラン)や
一右近のぞうの蔵人 右近丞(セウ)の蔵人 中川紀伊守(ナカカハノキノカミ)の弟(ヲトヽイ)伊与守(コノカミ)
がなや 叙爵(ジヨシヤク)もべきに 源除名(チヨメイ)に依(ヨリ)て 諸勾(ケツク)の札(ミフダ)をけづられたる
一海のおもてふすまの紙ひきたりたるやうに 定家(サタイヘキヤウ)の明月記(ニ)云 雨(ウ)
脚融(キヤクユウシ)地電光(ニデンクハウ)張衾(ハルフスマヲ)云ふ
一うさ男(ハラ)は中の君(ヘ)の 是を衰(ヒコ)
火ゝ出見(ホヽデ)等(ミノミコト)を源氏にたとへ 紛神(リウジン)の老玉姫(トヨタマヒメ)をあいをなりし
をあしれの名の女になずらへてかける物や

一 うらなき神の　花　住吉明神ハうしろ 楼の小戸の浪路に立給ふ
ひ出まする神なるによりて海なき神とハ申也 文海中此詩ニ
乳を添そのかしこまるあれども詩を見ても神といふるに遠
あかましきや八百会ハ八重のごとし
一 海ニいかさまにのかの　花　去根哥 方士が揚貴妃をもとめ
し時のすまい上者碧落下者黄泉といへるごとし
一 うらなくもさひ松よりなかのこゆるハ末の松山よりなきたるを
一 うらつけのあれ　花　せきぬるといふしれて人のなすをいふ也
一 うミ松や　海松とはうみのまつ也
一 うら人のさぬのさとうする　ひとさ紀もおけもみどりも給る
よりて浅深なるをいふや
一 うけ人　人をのるをいふや

一 うつハ　物流也
一 うへ人の女房まへ人と　上乃
女房とハ典侍掌侍等也 前ハ左ちかへハ右を云
一 うちなね松にまじらふ　花　文選に馬鬣松とみへてうらひ松と
いふこと侍かへる鬣ハむまれそがれにとくさぬをすつとに川さ
ろ津久伎云や そのつるにおひたる松をうちなね松といへるなるを
へいつれ松をおきさん人の形見とうらうきとく 中将の名をむかし
さ紀の人のこころとともに心あらわし　略く
一 うすがき　さむきさ神也
一 うへ人の女節　等　同 後ど人表
気にすりをうへ人の女節と云と河海にあり そうぶんや 一動其し
よい人の気にするハ大内よりの心也
一 鶯のきしづか哥　舞ハ正二古院おりしまさぬるすをむつ

れし茲とかゝる給
一 哥 鶯のむかし　此製紙代乃
背に及ぶぬ心ぞをとあそばしけるや
一 哥 うさ鴻を　うさ鴻ハ飛名所ニうき所と云心や
一 うつされひとへめく　うつもなるきや
一 うちどれ　襲来うつ所也
一 うつさまくら　名所の哥をあつ
一 哥 うすこゆり　柳似辞腰池如
一 こゝふ うつさづき　雅糸寮人や
ゆくり 茅子や
鏡文集
一 うつかれ夜もうれ志　夜氏にあらず一世源氏の人の女也 是名也
うつかの抽紙に夜原れ志とて一世の源氏にて太大弱まきより
と云人也 小方二人もちゆへらけり一人ハ太政大臣の姫一人ハ時の
此門のれいもうと 后腹の女一の所子也 ソノハラ 腹の九にあらゆゑて
あてごとゝと申ゝこめ心すぐれゆへらかれば 芸家をもじめまて 時の
いうそく男 ツタ 傳へて心をつくすまづゆること人ぐに心つよくて 芸家
へ来わゆへれば 源かれと云人ハ出家して山に 蒸 コモ なりて おこなふと云々
一 かゝり火 うち松　松炬 セウコ 出こゝちいさ紀さい松やかゞりに打へくとも寸夜や
のもさ
一 うつさなりゝ　うつりしきや　一 うすいろ　紫のうすきや
一 哥 ミゆき 打こさし　打労 ウチキル や くもり心や 行幸 ミユキ に雪 ユキ をそへたるも
一 夜もう夜 うつ川へ　やかてと云心や 打つけ同心や
一 梅かえ 右をのぢんのミクハ名　義和 ショウワ の所 右を陣 ノヂン の所 溝 ミカハ の邊 ヘン に地に
うづまり 後代 コウタイ 和 サウデン 傳して 手所をしらべ とと云々
一 哥 鶯の声にや　鶯の声とは 野曲 エイキヨク のもや 心志ゆえ 同家を 蒸 タキモノ の
ものや 又玉かづらにもとあくがれし心をあらべし

一 暮れねごれ。笹竹とは。落梅の曲のなや
一 うすされちをし　うす紅田のちをしや。りうめさらえとも。
一 うぶれ法しの恋　紅　白されぞとはうさるのまゐや
一 うちまいり給人のさわうをまいびて　宇多法師和琴名物や　以禮作や
まひびて。院の御門より浅茂の御方へ御調度などをちさこうや
一 うすらん　うすぎなや
一 内まゐれうぶやしまひ　御子
一 ふへの衣のいろくげちめさて　河　四位紫。五位六位緑袍やと
継生の時八丈御門よりうぶやしまひのなり例多し
一 うしろれぎわになるし　若宮のれ多八さ紀よ出てれぞのう
とろのゆりなる旅や
一 うちまきなし　来とき

一 浦海のおが　れ息所のちことを
八条もおじるひとするや
敗れよ指の小心なると哉りれ。古事云夏人心をハ不可付只能在
まや浦海の子　見河海
一 うらうらび　文さしまるる八多人
も小望まそつれるわしるれ賀そてさしまゐるや。君なと八天の器
戸なあづ枝をまをさち
一 うさて墨と　今昔九云。主君不
母史眼一年
一 うさ世まハ　ゆきうえあんそ好
の字れ心ず宮をまちさち
一 うへてうし　御法の時萩をこノ
家まゆづりあひし八二条院。今ハ六条院や
一 打すきひ　とひすびひ　浴身くや
一 うつしを　焼物のなや
一 うちひするも　舞声傍引来風下。手以五絃彈白雪水邊
一 うぶくのまれ　平ハ付物。曲ハ楽曲や

一うちすてゝ　此姫君遊のすてられしみなしごのこの世鴨のこ
まゝせおやうらみの子鴨の子や
一うしめしどいふ　うしめしどきは詞は世俗にうちじと云詞はあやまれり
一うき鳰の　陸奥守にて下し時のことをいへり
一うつし馬　様の鞍置馬をいへり
一うき世には　我身は山居しても、うき事を一筋やうにましきことや
一うづち　持統天皇三年正月、天皇親臨郡臣五節殿乙卯大学寮献卯杖八十枚、卯槌の事は、卯杖とて持つは悪鬼をはらふ心に杖を用れ、年中行事にあり
一門に文　門寮
一うどねりも　門舎人と云り侍の名也
一うつを　うつを見せ
一うき船と　うき船をひさいふ日の
いせにはあまた袖あれども、わが身はいはずして紀之人まほしはいはれまほしとひあると決定してよまれたり
一うちこれ人めして　従来等仕る人や

の

一のちの月　七月くのちの月いや
一のわきうちて　八月比の大風の名や
一のりの師　法の師　三周説法の首尾や
一のきのつま　軒のちれや、つまは袖のはしを云や
一のこれはるひかずき　行末とをく開きたるや
一のちの世のねがひ給ふのあなたさまも極楽の管絃哥舞乃菩薩のまねや
一のちまさらんよせ　ふ十賀の

時させめて。此夜は大きさせめへとれ心也

一のわらう二月とあしとせて　馬をとしらせて弓射るをのり
弓といへり。正二月のうまあるをうるを三月まで延引なり。理拾
三月も薄雲女院の御忌月なれば又延引也

一のかりての世　あかりての世といふも同し　上古のすや

一のがりよし嵯峨　御息所とおなじく煙となるん抱をとや

一のがりよし　のがりよしとは。結の御位のすれ。私たてぬとは此
別在。徐世をあきらるすをおそれとおぼしめせとれ心也

一のまとられくらあるし　春弓をとるす。礼記よりをとられる。
正月賭弓をとて。勝るの大将里才にて。還饗行へり。此時
青左大将大臣にて兼ると　一の代まけてしも　川崎未勘

一のわ抱　勝負の無抱也。よきのわ抱をぬべられどは女二宮の御す
をの給也。菊賭とす　一のく　をのく心也

一のわれしと　僧都を法の師と称るるに。なりひまりしぬ浮舟乃
すまてふとまどふと也　一のう　野原也

一のもせ　君もせなどとも　使也。せばさ心

一のとめ　長宗なる心也

く

一くらづきおさめ殿　内蔵寮　納殿　在後堀殿　蔵司とは御室
を垂所也。おさめ殿は。諸王よりまいりもれをおさむる所也

一くつおりなし　退屋の心也　頬　河　頬堕

一くしあけれでうとめく抱。くとあぐるなりや。河　昔は女御更

衣冠下常なる髪とあぐるをいふ也。鋏釵なども也
一くもゐの人も　禁中仙洞をいひて月とみんずるは母君あるさ
ちよの宿の月はおほよそ御すみかといふ心也
一くもゐのおや　主上親王国母といへるすめらぎの御事をいふべし。又国のおやとも
云ハ六条院の太上天皇の号をそへらるゝ故に父のおやとぞいはれける
かなしびすめる海人うつされたるや。おほやけの御かたのきは。摂政関白
の天子を補佐してまつる也。源氏君ハつねに号を号すとぞ云ひ
しぶおほやけのかためなれば、そのわざとも云也
一くもんさ　冠者也。元服する人を云也。くわさと書くもあり
一くるさん　くだりへ下る也。或腐れたるをもいふべし
一くまなげなる　くまなきや。くれなゐもなきを云べし
一くまもひ　籬也
一くるま　くまなし　おもひあるさま心也
一くるま柏　菓子也。柏子の類也　一くろざ　ぐまじく　おもひなる
や。格心に実なるハつれなしやうなるつまる心。又對して　おもしろ
なまめけるさへくろく心也　一くびほそし　くれりげなる
とれ心也　一くれなゐのこし　襷の胯也
一くちおほひて　袖そでうちかくしたる様也
一くれじ　なまじくれじくれ。とかいふ心也。くれぐれ同
一くるぐし　細砕　一くちずさひ　口ずさむ也
一くもんそく　眷属也。けんぞくともいふべし
一くゝるま　もちゐのくるま也　一ぐわんもん　願文　其
家室菅原氏四十九日願文後江相公朝綱書之。見文粋一生。　重明親王
四十六

香必滅釈尊遠寛梅檀之烟、示寂衰棄、天人猶逢五衰

白氏文集之詞也

一 ふしへらうとしかうかゝる

爵を賜也。五位より爵位の初なり。花にも一様の本もあり

あべし。年月日此叙位に六位の蔵人は必叙爵して従五位下に叙

さるゝ也。私云 蔵人をとこいふそこはなやかなる

ごゝもうちそとゝ云詞也

一 くらつきて 功也。こうの入る

推ともや

一 くしまき 百済国の事也

一 くさそめて 気也しと 浅きものは卑下の詞也。けせと云すべきは

さぬまじきど此心也

一 くしめ人が心のくろしまするや

くゝしと云ものあるを。又くゝもときもあるとき

一 くしせられて 候陪膳の女房御膳をすゝむるかまへ也。これもあり

めしくありしき詞也

一 くさや さしがらと云心也

一 くれなゐかすり 紫の事也。紅葉の事を云。紫のまれなる也

一 くれしく くれつ人の事をいふ

一 わか夜のがう 轂 老子曰三十輻共一轂者君輪之正中而為輻之所湊也

一 かやしくもうし あすひはあ

やさあらずらるて実は不定也。されはくやしきとや

一 くろきくるみ 黒汁枝 女房銀米 眼若の事

一 くもんざうれてん 萱草色黄色也。眼者薄くくらうきとある

一 くろずのとりね 坂のつくろあるを云也

一 くろつ件 あるそぶらんしは実の心にていふとしや深の縫

まづらんとや

一 くろされ車 眼者ノ車也。枚

車ホと云也
さぬ焼物の名也
いいまゝなくて除名とみてさかつさなどとしるしとは除名と云す
也出身よりこのゝなりさくれる官位を恵のぞきて無位の人
まなるすを云源氏も除名せられしまゝにて無故の出長とさ
ゆふとゝゝゝ配流の人をば必先除名するすや除名ぐらにて
流罪をしれぬすもまゝそれは罪の軽重によるすや源氏の除
名は左辻の例を用ふるや菅丞相高明公行平周公且なぐられ
すをとりて云ゝ也云ゝ
愛の行法也
づして轅をおろしてや

一くろぶりまゝにて　黒方蜜を
一官爵をとしれす　源は流罪
一くやうかうしもこて　三蜜六
一車ともかさおろし　牛をは
一くしれさゝおこぶりのさゝわこ

のさゝ　櫛箱　中箱　香薫箱　うちこぶりの箱のかたの上にて
は髪をけづる時おこぶし給れば莒の名とあるや　花
一くらもられみゝ　くや姫に心をかけし人也　蓬莱の難到すを知
なぐら例て　りて　ゆくる由にて　玉の枝を造おて　姫にこせける時　玉造
ゝろ　さくこのまて　禄の赤下をせかけるにて　偽あらはれて　無曲なる
き　竹とり物語ニ云
一雲のうへに　正三位の袴にある
すぬべし　呼　兵衛の御用云又正三位の中の人なるべし
一くらねさくのかりせまめけぬる人　金光明經曰獨拔而出成
仏正覚老子經功成名遂而身退者天之道也
一くらに　苦丹也　牡丹とも云　皮の類に云ゝ
一くもりもなくあるさに山頂のほそなるが　あるさいさぬのすや　山頂は

面くち柴裏紅梅なりと云さて玉やうよくもるもなきなといへり

一くろさかいねりのさひしきさ　かいねりハうもとぎぬのもりたる

やさりなぎへハ黒くなるや さいくしくハさやくどもりたるや

一くもて玉　昔武徳殿にて、此日の節会行れて、騎射のすあり、

其時宮門有典薬官人あやめ代献ど又内侍薬玉を太子已下

に給時、くもて玉を右の肩に打かけて、左の脚へたれて、二の緒を分

て脚にゆひて、各拝舞するや 續命縷と云なり、只命を延る

いはひとなするや

一菓わりこひたちの海　菓花

とハ近江志我身によそへたる丸、ひたちの海のいかだしてこれ浦波

に立いてんと云へる丸

一くろぎあるぎ　皮なるを黒木

皮をけづりを赤木と云也

一くらく人右衛門　延喜四年小

昨行幸の時、蔵人左衛門源俊春を使にて維一枝中なる人なりを

あくりて、其例の心なり

一くちおしきにこりれ一ぬりし

世人皆濁我独清衆人皆醉我独醒

一くら人不　蔵人不殿上にあり是ハ六条院のなり

一くん恵なり　慧衣香くれえなり同

一くしあげの内侍　勅云　内侍ちり人のまた役をつとむるや事

一くりん仏　國史云、義和七年四月八日請律師偽町大法師位

静安於清涼殿始行灌仏事　雅古天皇十四年始無等四月

八日設無會　日本記

一くもしるどやうれ之間して

薬師ちどのやうに此身ちりう居君のよりね給ひすをいへり

一くやしくぞつゝ代　摘と罪と代兼なる詞也、罪をしかす心也、源

氏とハ神ニ多くゆるすがしてもあるさと。浪梅志語心ハ

一くるすれ 名今東山城ノ国愛岩郡ニ内。小野ハ上賀茂郡也。
栗栖ノ下社領也。寛仁二年十一月廿六日陣定ありて官寿をな
されおりかぬ。此物語にくるすのくれさうちくらんと云ハ此事也。又
宇治郡にも小野栗栖野ハ云。それを云にあらず

一くれるゐのきはゝ 紅に深袴を服の時ハ黄がちに深て一暮の弓
主恵の服とさるや

一くちう 九宝 宮中 宮中を
くちうともよむべし 夏説

一くちうくるゝ 服者ハ倚庐と
て板屋を切さげておりしまするゆ。倚庐の弓ハ日月の光にもあ
らずとや。礼記問喪篇 寝苫枕塊 哀親ニ在土也

一くづれそめて 小 ようしぬ女の心とけ初ぬれバ名ともけらずとや

立田川にうきいはん為也

一雲家を 雲候王宅 記人なるの
心ハ。雲霧の中にましいるゆ記人やいとなる

一くちつくぐて 勅定とや。狂ごちても同心也

一くるも ひたちの国の共のくろされくるすをいくり

一くそんしゆ 参救也 くそんずとあるなもあ

一くどくのむくひに 経信する人のすや。面目悉竭厳為人所喜見
法華経 信表切徳也

一くそくち 厚達 古今集の作
者にも。くそといふ名ハ

一くちまなどの 死庚 槁木 枯
ゝる心也。枯ゝるまれくとく無心にして云心

一くゝねなど 官位ハ愛心の妨とせらるや

一雲のそらに 横川ハ雲のくろ山なれバ。此あくらハさもなきまゝ。

山風吹ともしゝ又とひのへとなるを
源氏月案巻第五

や

一やんごとなき　無止すとれ儀や上臈貴人を申せ心ハ位
なき人のすハさしとれぬ物なれバやむことなきとはいへり
一楊貴妃　長恨哥を引
一やくためしひて　やくハ断せ
一やまとさう　和國のおや日本
腹踉跡を
ね人のすや前にやまとね人ことをのひしき筋目をさゞへし
とれ心也　右京仲丞光孝天皇をねしなりしハやまとおや下
の詞ハね人ハまことにかしこるもちかさハ高麗人のすや
一山がつの山ろハ桟と云や　タヾがかの昇下や　猛子ハ子よりけるや

一やをしゝ　きつかるや　やもしかる心也
一やと　やといふ声也
一やこゝなん　やむ止や　又病や　所によるべし
一やうかるを　藏かりと同し　一やうめいのすけなる人　楊名所
三ケのなすし一つや　新撰古今雜中　源氏物語　楊名所のすを
忠ち朝臣ハ　[illegible]　送りける　前京雅朝臣
つゝへとて　[illegible]　タヾがかの宿れあるしれしるべともなれ
久し　忠ち朝臣
こゝろあてにそれかとぞわつゝへそれぬしぎまもぬタヾがかのやど
昔よりも秘すとしてしるを　一山がつも兼れげよハ　古今の序の
詞や　一山のそれ　山のそれ　源氏にあるべし

月を秋分にそしらるや　一山びこ　あまびこ同俗にこむ
といふこれや　一山へ　山とぞらいへば數山のすや
寺といへば三井寺と知や　一やらう　屋廊やとらうとや
一やよひ　三月　いつまの月もやりしけてよむや　五月をむつき
二月はきゆらき四月うつき　六月さつきいつれも此類や
一山ぶき　袁山吹のきれは面て黄に袁紅や　花山吹は面て薦
朽葉　裏黄や　一山の音もおどろし　琴のさゝら
へときて鶴雲ねよりくぐら　池の黄もうゝふといふすあるを
一山ちにまかりわたる　くらまへ尾志のいらせ給を靴とや
一やどもえきそらず　是はともえ申さねや
一やしまもり　くらつミ神とは地祇と書や　山祇と書ては山づゝ
神と讀や　かゝは惣名や　一やうの物とおなじやうれもれ
とや　秋宮秋院いづれもおなじやうに心づくしなるすをいへら
花去年の九月は秋宮のれくぐらに心をつくしのひ今は又秋院乃
ゆすにようとて神とかうちのみすや云々
一山つと　集日本記　土産　異万俗にこやげと云すや
一三月廿日あまりの行　秋宮左衛左遷太宰府云々安和二
三月廿六日や　一三月のつのうちにきくろこの日
三月朔日にあたる上巳云々　世風記云三月上巳桃花水下之時飯
食為脯　續漢志礼儀志云三月上巳日宮人置禊飲於東流水
上　上巳祓禊のすゝ　詩学大成にあるを三月桃花水下時に祇
蘭葉招魂續魄祓除不祥

一 山ずしのひがたるは 山伏、野伏とはたゞ世俗のがれて山林に入す
心也。惣る出家を云とこそしたり 一 やぶぐら 藪原
一 山人のあるさこのこ 文選潘安仁笙賦曰 棗下纂纂朱實
離々。事文類聚李少君以却老方見上少君曰臣嘗游海上
見安期生食臣棗大如瓜 今棗あるさこのこは棗の熟平
一 山ぐちはさるかけれ 山口は山入のちじめを云也。伊勢造交のあら
んとて十月に山口祭あるされも松入のちじめ紙いへり
一 やまとこれ紫には秋の表を 万葉第一云。天皇詔門大臣藤原
朝臣競憐春山万葉之艶秋山千葉之彩時額田王以歌判
之哥 秋山の木葉をこそは紅葉とはとりてそ志のふ略之
一 やりぐ そとづ也 一 やくとは文を取役にかさ給也

一 やまとむしぬ 秋田のめあしにあり心也
一 やりたの家と戸はまつらまとぐれ 松浦 藪湾は同松河 藪湾
は八幡同神。藪湾は藪前神功皇后なり
一 やちきれとりも物 柳は西白く裏あをし。夜は印笠と云也
一 やさしきかたにはあらねと云 かたれ おそうすくなきをやさし
きとし云也
一 やまとこと 和琴の名勿論也。されば寝りては只和國のことし
と云へるにや。又そへていへる也。和琴は絃六すぢあるも
一 やなぐねなどをひて 大将納言以下弓箭を負るも
一 やさしかるべし まつしきや。たゞやさしれとも云。取によるべし
一 やちきれ下かさね 同志りすに志すとこも。下襲のいろは時

節にもらしぬことにや。一答下襲の文。時節によりたる。梅梅
は十一月より差用するや。其冬は御と号す。夜は御茶と云。同物也
一御の衆をもしらびあてゆべき　史記曰。楚有養由基者。善射
者也。去柳葉百歩而射之。百發而百中之左右觀者數千人
皆曰善射
一山あゐにすれる竹のふしも
架裳除時祭幸人行文其摺袍薄蔔深下襲地摺袴合
袴。陪從樓櫚文其摺袍柳色下襲。白綾袴。合火口赤純半臂
緒別帯等。各用付之。畢詞のつゞき。東極の襲来にや
一御をかづりてつくりたらん　河　揚御を白き文にあとへ略双
茶茶をおなさいろによそへたるも
一陽成院の御筆　陽成院の御弟に。或ハ宮貞保親王と申
そくそれを桃蘭の式ハ云ふまゝずしへたる説一説也
一哥山星の衣をそふる　此詞巻の名大将の名にいへり
一哥山がつれまゝ紀を心元なるゝ方れ君まじき心あるをいへり。さ
やうのへはこゞめじこや。常の心元なるゝと云はかゝるべし
一やしきを給　進也。とひやふ心也
一山ごゝの心ら　山高は山のおなをへぐてゝぬる物也
一やしきをば　やしきすれば也
一哥山れ　こゝ　笛を慧の喫ぬふ
こ。推量しぬ也
一哥山ざとれ　こゝ　しゝ庭鳥也
ひ弟くのうちの者ならじ者あつかたり。是にそれをもたせたるも
一哥山姫の　文ゆく深くうらぐぞ。さふ方なるんとも。大恵の心はいづれ
ともわかるゝども。恵の中恵にあひそめぬひしなにそれにうけり

そんとれ心にや

ひかりはへぐそなくてる心也

不とおもはずは一夜もありしがるかんとれ心也我生のうさくるす

と寄生身とへくるすを

一やぶしわかれは 藪なども日の

一やどるもまと 昔やとりきくる

一やかれくるを 家巽也

一やどるもま 前の参の哥をさひ出るも

一やかりかいは 戒と破るもおほれどもと書の何なるも

一やまもれはたる 浮舟は秋の比宇治へ流りて明る逢れ三月に

小野にうつりぬへは黄はいふ給まじきとし云説也 浮舟は薫の流

し給ぬ以前に宇治へさいく流りあふすを不審なるを也

ま

一まぎりつかまぎれ ゆき 菩薩に通ずる詞也 正神にむかはぬ心也

一まうけの志 儲志 基本也 一まつはさせ給 纏

一まうのぼしをあふ 参進 日本記 東昇とも出也

一まさなきす さがなきと同心也

一まぞなん まうづる まうでまうる 皆和へまうるしいづる心也

一まどいる まどふ也 一又いしをあては 内門更衣の局

へさびくしたるせ給すといへる さしまゆるさ給はずとは

内いとまれるも 一まげくるす 曲くるなるべし

一まくしくとて まくしくとぞ也 明書内口ずさみあふ心也

一まめくち 寛ぐちも 一まぐ中将などに 源氏此時も

中将也 此抽説には通しるを出つくへる心にてかくいへり

一まれにはあるがちひさんなべ 荻童又宅蝉などに心をかけ給すを云り

一まほ　まほとしらむ。真帆と云は詞也。かた帆に対して真帆と
いふ詞なるといへるなりや

一まさるゝ　まさるくの心也

一まらうと　客人や

一まくらかみ　枕上や

一まんな　真名や

一まうと　真人おなじて云詞也

一まろ　我事を丸と云事多し

一またゝき　燈のかすかなるひ

らうえい人の月にうかるゝ

一まつりかへ　陰陽師のすることや

一まされる衣　八月九月正長夜　白氏文集

一まじわざ　まじなひなど　厭術加持なとしたる事や

一ませのわたり折なるか　白ひやうなる袖や

一まうとうや茶の　うすむらさきは深の外のかりのまはしなりや。

むらさきとはその詞志実なるべし。それとしるくもゆる心也

一まひ人　まひびとしるむや

一まいて人ぞくふ　午膳おなじ

てんぐなや

一松の雪のしおれ　貞松歎

厳寒とはへかるも凋ざる松の操のあらはるゝゆへや

一まんけいし　政所ハ也して、才ある者は用をいつくしみあまる

さうしとも新身ハ入るて、後あるすなとはつるさとなや

一まゆきとは　紫とは母なる袖やしまひて

あれば三月の眠を一歳心ざしとて、除服の後も忘がたくとはきる

の衣とさるゝや。まずゆるさきとは紅梅まえる梅桜なと名

あつこゑと云べし

一まつひ　まつふたつくもれなら

なぐらるゝあら人なるや

一まつれ雅　条といひそれ模様

のまつりのるや

一まつりをそどぶて　遺愛寺鐘欹枕聽　白系天

一まつりをあらはすぬべくおぼしたる人どの物いひかりしなどす

家紙写て。此節はまして深の所は落とまりてもありたくしとや

一まくなきつくらもて　定家の説。まくなき歌云々瞬がぐとす

や摩通那波　日本記

一まつりかれたる所ひたいがき　紫上

の髪が洞にしすほれたるを云や

一まてや　まてしばしや。大夫監が詞や　泳　日本記

一まくしき　瞬や

一まんまくしくれくちもさみ

西京抄云　踏奇日。舞人起座唱万葉系。祇皇延祚億仙

詩　万葉系　元高慶席年光驚。催馬系淡海三船撰　今案。万葉系は

すべて八句の詩や。それを漢昔にうたひて句ごとれあらひは万葉

系紙となるや。踏奇れ舞人のたちき後にいつまりなるを。深

氏の君のロずさひにのりつや。しばしく二句をかきつけ給ひ

一又もかいめて　一通は雲ね居。一通は此節方丸

一まんなれすこしたるほどに　若まんなれすこしたるとはことすく

して。草に書たる紙云。それは我もこの所なる紙をやうに書

すぐさばしどけなき文字すぐさになるべき心や

一まぶくぬさうし　寒柄とも草子と云や。門外典の書にも琴

第一。第二など云外記あるを。寒柄の先にてあるや

一まとねまべし　此様や的射弓あるや

一まつりの心うけ有ふ　神を納受し給ひとれ紫の上れ心や

一 まさいくと柳葉をとり 神木有千歳早哥ことゝ詞也
一 まもるとつよく 源氏に此見所れうんとしぬへハ仏神の守護
し給ぬへ。えらるゝ給ひて。ぱ第上に寄給とも
一 まうびるさるれ 仁和寺の中書ハ大日也 摩訶毗盧遮那と
ハ大日を申也
一 まかしつへきましく 行人の
脇さしれおそろしきき風をいへり。何まかしハ目也。つへきましく
もまいくしきちどやうの心をとゝ
一 松の滂と山 類の小にある名所也
一 松滂のあまれ 衣のるるしハ。志用れて力に海とゆるゝをいへり。
されバとて今更ぬさうふべき名をバいかでかくてぬふべきとも
一 まと紙う河声 映く殘灯宵壁影蕭々暗雨打窓声 白氏文集

一 松の葉をすき 仙人王羌食松葉不飢寿百七十余年
すくハのこのれ心也
一 まさくすきまるに 全ゆゞん
なき心也
一 まうでこと きたれと云也
まうげこそ心りしちくさいたるゝまとも
一 まさぶつと 朱れ枝に山さらぐれを造営まして御づりを投まろ
らぬから。杈椏和名未太布利 一 まさかりぬ かりぬハかれぬ也
杈椏にそへこゝろと行こしらるん。松にそへたり
一 まろこそたくれ 捷仙客をもて苔のくり。苔ハ中宮の北方
なれハ一本宮ぬれおぢこも
一 まろなり 園頂 法師也
一 まめ人 志人也
一 まめくしき まゝ安也
一 まがく安 狂言 万
一 まうちきんこち 大史也

一まさぐり　こきまさぐりもてあそぶ心也

け

一げらうの更衣　桐壺の三四位のむすめ女房なるべし。更衣とは三臈よりうちそひけりまゐりて八桐壺の更衣ハ中納言也

一けふもしむべきいのちとも　更衣の星までのみといへり

一けちえん　袖ひとつや。出るかぎりてもよやと心也

一けうあるけふ　興あるべし

一けしきだつ　ざれごとも云。それ詞よりつきて心におもふや

一けそひ　気早比　敗勢

一げびめ　河　結目　掲目

一けさうハおもひ　けすしくハおもひや　河　不下湯　不正

一けちかさ　気近

一げらう　下官也

一けうこく　瞬息也

一けちうす　暮のくれ也

一けさう　懸想也

一けいめい　おどろきさわぎれいる心也

一けうさき　気味　気外

一けおそろし　気おそろしき也

一けどほぬる　気高きところや

一けしきあるものしき　てをしぬるとや。いし思ひよろび

うろしむ也

一けうしひとをいさけよみちめり

一げんじのれ肌とげしひむとぐひろまあさくろ心也

一げんきのおこるひと　験方や　肌るぐきもぐんのあきら云日

一けちきくわり　梢ごしのまえいづるとぐるうるやうや

一けぶりぐりとおまる　わきもずすみもとおうと云也

一けぢやり　清万

一源氏のお様やけぢと　此源氏

親を迮給源氏姓とすや。拠光源氏

一けうく　花見の所業也　一けんなど　誘

一けうをさうすべき　花をさうすべきなどいふがごとし。一催興

うゝ心也　一けふは六日の所もいふ　長神

物忌也　長神方遠ハ。又日六日續する也。又一説。行ってもくゞ物忌

がゞきゝうと心得べし。天子の所物忌のあさきゝう日也

一けちえんなるほかげ　揚焉　あしかるゝ火氣とも

一けうさうし　源氏をついしやうとんとの心也

一けうある郎のりしえらて　翰林の人出郎する也。韵の字も

切韵とて。何字をもつて韵とするさ云時もあり。又郎の中にも韵

とゝて。郎の又文字の中。平声の字を取て。韵とするもあり

又何韵にても。作者の心まかせにも時もあり

一源氏のうちつゝき居に　荻壷の中ぶ文の後。秋文乃女の中文

源氏の姓を給ひしぶれども。帝主親主の所女をば。皆源氏にする也。

心は荻氏の中絶すると也

くつゝろ也

絜秋丸

ちぎりくおくはる心也。けんさうきを

一けぞん　家損家のきをか

といふ心也

一けうぞん　孝ぜんや

一けりんけうを　花文綾ハ有花文綾也。謝恵連詩云。客従遠

万来遣我鶴文綾と云同心也。或説顕文綾也。かんむしやなど

云がごとし。是ハ夜の出衣を云。当時ハ穀の堅文なりをもちゐるや。大略同

きれは比の花とは畸似菜の花と云。夏の垂長。花岡に深り花也

一けやけうもつうまつりれ　芦垣の哥は男の女を友なひて家を

垣を越ていぬりを女のおやにつづり人のさけりをなとこゝめぞつげつゝん

とうたぐるを弁が持うたひの花やそれをけやけしとはいふるやとぞ

けりは家のと云詞を年へはけりは家のとおとゞの助音しのくるや。

花は抽紙古句を引かへて時に恒てけるを多し是も只引かへ

なるべしけやけうむ字なしとうきなど云心也

一源氏のうちつゝき名は　菜花抽紙源氏の打つゝき名にあ給す

れ。其日の外のれとゞめあるとこゝろ

一けうぎ　媼類うたが志也

一けうしのかさち　脇士菩薩脇

は立給　観音勢至のすや

一けまあしうきてけりし

夕雪の前の詞は世中をむげにおぼしたるもあらじと

云を。寄とゞめあて。我のこやうさ世をたれりとこゝろ給るや

一源中納言　蓮中納言のよし。行河の東にもこも。又推本にも。中納言

は歌ぬふとかけるも。蓮は歳の時ぬべし。紅梅行川推本。同じ時分

をかきたるや。此は男にこそ。されと混乱すべからず。蓮の連数にしぬ

の巻の三とをぞかりになりぬと云。所は要領也。同東のみれ字ニ整

一けんぞし給　碁の助言也　畔見紙の心也。又現記也。けそうと云

たる所もあるとけんそうとある所もあるとおなじるまや

一けうし　孝養也

一けうしゝ　織也

一けしやくこと　讙摩は芥子やくるあるとけしのかも同し

一けうのこと　希有

一けさう　化生

一けうやく　挍易（ケウエキ）地をへくらをとも云うらそめげよ地を作りを云

ふ

一ふくそじめ　皇子（ワウシ）七歳（サイ）にて、いづれも時（ハナセ）まゐて、れ註孝經序（キウケウ）
といふ文字をあてゞしそむりや　疑れ註孝經或ハ貞觀政要（ゲヤウグハン）（セイミウ）
とよくそじめん語や七歳（サイ）の例（レイ）多（オホ）し

一ふとうし語　舞（ブ）踏（トウハテ）手の舞足（ニヒ）踏（アレブミ）なるを

一ふちつぼ　鬼香舎（ヒキウシヤ）や

一ふとしも　ら亂もそひつぬや

一二のみちうふ　貪福（ヒンフク）の二道（ノ）や　富都女易嫁（フカノムスメハヤスシカシ）々早輕其支（カスルヤウ）
貪家女雅嫁（ヒンカノムスメハカタシカシ）々晩孝於姑（シウトメニ）文集

一ふもぶり　俗にいふと同

一ふびやう　風病（フヒヤウ）や　又腹病（フク）や

一ふいま　不意（フイ）や

一ふつゝかなり　いまれかハふとら

うらへとゝ也

一ふまう　ふ用（フヨウ）や

一ふるあねのうちき　赤裙（ベニ）青裙（アヲハナ）とまてそむりを二藍（フタアヰ）と云二
まとよむ。ふるあねとも。ふるへといふ同しすや

一ふびんなり　びんなきと同し。不便（フビン）や

一ふくろう　梟（ケウ）（フクロウ）　説文（セツモンニ）云食父母（クラフ）不孝鳥（ヲフカウノトリ）や

一ふくいとくろうして　河裙　ふくしなまこして。かゝの文かくろ
きや服ふ用

一ふせぐ　臥（フセコ）籠（ワクシ）や

一ふりさへ　わざとくいふ心や

一二間のさハ　ふるまハ持仏堂（ナヅドウ）や

一ふげんほさつのれる地　普賢（フゲン）
ホンゾン　アンチ　本尊安置（ホンゾンアンチ）すり所や
菩薩（ボサツ）乘大白象（ノリダイビヤクザウヲ）鼻（ハナ）如紅蓮（コレ）華色（ケノイロノ）　觀普賢經

一ふりきれかたぎぬ　てんといふ獣（ケモノ）の皮（カハ）にてつくらうそぬや。昔も

まれに恵する物といへり。貂裘ゆるさてんと云歟名也。如鼠といへる
指遠云。ゆるさのうちぎぬを。高光少将入道横川にすこ行けるに。
中宮女子にかくしける哥。有別紙

一 ふでのさらとりもらせ　おほきぎ紀のなる紀とや

一 ふこなどかうずる　若詩を披論する時は。庭中に立たる文基をか
きて此歌にそそく。文人どもは階下にすこそて。論頌するや

一 苟のえんしのふ　若おほやけごとにあるずらへて。太大臣の亭に
て。苟莫宴を。又天暦三年四月十二日。花香舎苟莫宴に和哥
管絃あり

一 ふさりしからず　不詳しらるべ

一 ふるき抱ふる紀少す歟　長恨
哥。唐本多ち琵琶　食寒とあり　白氏文集第十二唐本引

勘処旧枕故衾。誰与去云々　吐源氏心也　永正七七六記云

一 ふちやうなりつる　不定也　一 文主の子武王のおとうと
史記。魯世家。周公自稱河にいへら。成王の何とかの給へんとすらん
とかけるは。毎とへば周公の王位のつゐてのぬくなるに。武王の後は成王の位
に付ぬへり。さらに此物語をなずらへていはく。朱雀院の脱履あるに
今上の位に付ぬべきなるや。さらに朱雀院の次に此第の冷泉院也
此位に付ぬへば。ね遠するやうなるにしたりて。成王の何とかの給へんすら
んとは。今上の此事をとりかへさと云へる心也。我文王ゆる。武王ゆる第
成王ゆる叔父也。於天下亦不賤矣

一 文集　白楽夫の詩賦とあつめたるや。七十二巻あるに。長慶集
とも云

一 ふんのつるさ　若勅召書司云々

祢唯作云御手奈良ニ万為孔書司則取朽女加琴置之而奏云ニ
今東物合の湊ニ必遊あり書司ハ女官の名也和琴をつかさど
るよし和琴を上やて文のつかさ云也くちめハ宇多の法しよ
りひかる和琴也　一ふうさいしろしよれ　琴をもさえ
つとひて此会の所和して琴をうけのぼへた継ももてはく人ある
ゞとよきまくち　一ふけんこう　普賢講
一仏天ゆげ　まさしく夢しるや
一ふくつけがれて　大きやうとや呼力を入るゝ海也
一ふえのきるもみなことハ　向子期思舊賦序曰隣人有吹笛者発声寥亮追想曩昔遊讌之好　文選
一ふなんも　大路　銀家國のこれもまた名なり也

一ふくろふくろう　昼のすゞめハこゝろ地のさやかなぬかなしきや
一ふぢのかそなが　女の装束もふくこゝろぬつるや
一ふれぐらひ　縕や織おしけべきすされやや
一ふくいきさ　むさがる也や　一ふくとみのきびして　王ハ大宮
の孫や源の子まても草のとのまゝみや　ふれてもまあれぬとの名へら
一ふんせうにも家礼といふす　内大臣の紙ハおやうくあるな夕霧
の家礼のうとまよりまぬき根絡目や家礼と云ハ子ぬ父をう
やまうすや従人なれだ子と進して礼をいふをぞ今の世よ
も家礼と云やあまりしれずへ儒作のならへと云や
一ふせをぐしひやけさ敵　親王大臣以下布施を内裏よりくだ
給や灌仏の布施ニハ昔ハ紙を用ひるを中比より絹ニ致るや

一 哥 ふる柴ゝるを名ゝる事 あさ紀夏わくハ浅黄六位袍にそへるを
一 若之 菊衣にもなるゝやつれ給 服衣をもさ給ふるとや
一 ふくちれそのに 奥入に引哥を不用云々哥ノ科凡俗なるも只猶
分の程あるとと心得てあるべしと云々
一 ふといふものゝかぎり 譜や河海に琴の譜のゝ程ゝ略しく
一 ふんじこめて 抱気を封し 藤原行楊者の様や
一 柏木 ふりぐさう 女三尺に成ても旧ぐさ紀と海や
一 ふさうといふんにハ源氏のさずよりも女三宮のさすが矣止とや
一 ふりめき心 古風なる心にはさふとや
一 哥 ふりさ衣のあれ 花 翠の様にふる程に更に詞をばかりさぬとや
一 哥 ふれ竹にふさよう 柏木 夏中のうる風とは息にてすり

わさなれバや ことなるゝぶとハ必や音律ハ皆声の調子に付て吹
つゝふりや ゆゑごとし 一二三日 ふつかこゝかとゝもしべし
一 ふせんわう 浮線綾 唐綾や
一 ふすく 粉熟の穀を水炙におるとりて粉にして餅になし
てゆでゝ甘葛をかけてこゝ○まりして ほそき竹のつをして其
中へかくとしめて志げしをさてつき出して其姿双六の調度志
ごとくまるゝやうつかの抽紙にあらく
一 文 そてまつりのふ 先夜 昔にて翌朝に詩をまるもあへり
一 哥 ふりこぐれ 半夫とハ白と茎との中をいうごとしふ時分ゆべ
し身のいづるへも不付と云心や
一 ふりう 武勇不道とをなもを 一 ふり川の 浮海の心ハ志しく○ぞ

我むしの始ともふとや　一ふところがと　たうがと同れ
一ふさいのる　吏妻や　一ふかう　不幸

こ

一ことあり時も　いかしくたきちかすあり時也
一こちるかるる　此方彼方や　一後涼飯　此飯の雨にあらう
れば　常の御菜にちうきや　一こころさん　心菜
一こころだせ　心操　一こころきりしけるやうり
きものつぶると云心や　一右大納言　勅て右左大臣故何
べとあるを　清道をひしく人のすや
一こと草　言種　一こまうと　高麗人のすや
一こうろくさん　花　職員令の玄蕃をば訓に法師まらうとの

つきとよめり　玄は僧蕃は客や　僧尼と云もれ　むかし百濟國
よりも来朝もしゆへに　蕃客とおるじく　此寮に川かさとるや
又鳴肝は腹の前を曰肝　鳴のなくときこゑをいづる所也　故ひ
鳴肝は声を作ると云心や　異國人来朝の時は通るすといふ法か
さあるて　毎日の心ざしをつくふりゆへや　七条半薩にあるしと也　或
今の四づかと云所の色しとや　一こうるく　無餘　ほめたる句也
一こうさうねん　穀倉院　おさめ飯のすや
一心あて　をしたりや　一こち　まつらごちなどいふはまつ
ひとごとや　ひとりごちも獨言や　一ことえり　言撰や
一こと中に　雑なるすれ中也　又能中などいふ心や　花こと
なる雑ある中にや　一こめさて　巨字や大やうの

称也

一ことさらひ　ことさらにわざとしくらせたる心也

一ごうたち　後進　御白氏　女の恐名也

一こと人のいとんやうに　いろこれにしたしぬ人のいとんやうに

と中ねのの源氏の君をいひあふことごとなり

一心ちらひ　心づかひやおさそ古法也

一こや　これやといふ心也

一ことのねも　祇つれなき人とばえやはしらじめあくるかうわかし

まもられて庭の紅葉をもかこまてこそやしなれといふ心なれ

はねるまゝの義也

一うしおれがこ　詩のすゝ也詩に

も所のごとくこしおれる

一ごくわちのざうやくこくわち

ハ夜の暑気也　草葉ハひろと云物也　暑気をさり物也

一九日のえん　重陽宴ハ天皇南殿に出御あらて内弁弁等

あるを文人博士をめして紙をなしめて各韻の字をさぐり

事詩を作て講ずるもあるを

一加濃のこと　中納言にて左手つをけたる人也

一こゝあくなれば　ことぐくおくく明りや

一ごうたせ　博物志云　竟造圍碁

一こうきあやのひとへ　女房の袈裟　此月此日よりはすし　我つ

ひわるをさわそひとへさるといへり　こさあやはうちきなるべし

若　こうさむしさ紙に深くるといへり

一これもれも　こゝのおもわしこれおもや

一うじこう　たゞ拙まうじょう心や。うらしめぐこう扇や
一うつのちれ　九品上生のつゆや
一心あそゞ　花夕がハ女のかゞみとふへてよあか家に光ハ源氏
まらそへうべし　一これうかおづり　夕顔の宿
ゞ惟光がめしろ法ゞいろ人をおづらごゝろや
一こゞのらし　小舎人童　中将女将らもしまつるや
一こゞくゝ女寸の気や　一ごと　如や　おきじとおさ
ゞしや　一心づらこる　ぞとハそへ字やよし
あさこらおど門まや。しづるゝ心のぐこせゝへゝゝばらむ心や
一こゝらし　河　お得き心や。祇園ならや。なくくしゝや
一うしらへ　うしそゝ心や　慰心や

一う忘うそれ念仏　葬送の前無言念仏。得十五功徳云々　河におり
一このうれあるしと　鵺や　かしろどきくべき寸ちおしの院
ゑもちの鵺のちきさらぬべし　一このほどまでハくゞりふかう紙
中陰四十九日までハ中ゆうらくづらひきうまつぞとや
一この家のあとぞ　楊名披書ハよし此家めかさ婚や。主人の内
嫡女兄文一人ハつくしま汝す一人ハのかう太臣ハ内の夕がのあれと
が姫や　一小娘なれど　生娘のやさしく
三ゆうき由や　一近衛の中将をすてゝ　山明石ノ
入内。家太政家の時近衛中将まで成られしを捨て播ァ
のふ雑をおほ給ひらや　一ごさん　儀式　加持祈禱や
一こゝしぞらのちかハ　誘拐禁足の搭。三年山ごもりとや

一えんかうしのすゝ　金剛子念珠にてくるゝは元興寺資財
恍第九にえしたるを
馬と貴布祢の中に僧正が谷と云ゑて業師仏不動尊霊験の
地也業師仏の壷を僧都の送物になるや
一ことばおほうへにて　抱よくいふ紙云也
一心よくわたるをぬべかるれば　丈夫人紫の上いしをなてはとや
一ろくもりしこと　葵上六条の息所の件也
一ことに人のいたんやうに　命婦は源氏のめのどにあれば　さやうにとぞ
なりとめそとの給也
すきたるとや
よむべし　なるにおまへどうきたりとしごをんとよむべし
一こしう　巨こや　おほやうにうきれある心也
一心ゆゑ　なくさまぬるを云心ゆくはなぐさむ心也
一こしのうちも　中宮の行啓には鳳輦にめさるゝもあり　又庇
のいとげの車に紫なふ時もある也　供奉人の行粧も紫物なり
よりてかりするを給ふや　伊勢物語二条ノ后の民部ようでを引也
一後えんのす　弓の誥をた大臣にてあり　後宴といふ名目も
男踏哥の後二三月に弓の誥あるをいへり　それを宴にあ
るし給ふや
むらさ紀の雲をうきて月をいぐしたるにや
一はれまへにそいかげをかくさせ給ふめ　二条のおとゞを忠仁公に
なずらへて　かげにそうくさせ給ふめと源の給へる也　伊勢物語

さく花も下にくゞる所に例ふる也

一ことつけて　ぬかつけてや

一御講の日　御ゑい人の日也今禁裏

後の御院ト定まりて後、宗門にのぞきされたる事ありて

する物御院へ入ぬ、物御院とハ、禁内の中、太膳識或左近府など

を點じて是れなりて三年繁御の中にて其年の四月に御社へ参詣

あらそ、禁のおる吉日を擇て、又御襖の事を則法楽呼ぶ事なる

入ぬ、これを二度の襖といふ、さて中比酉の日奨義社へ参りて参す

に陪従や毎年の御襖ハ必年日これを修するや　下略く

一こさきあをゑびのこと　花田にお紙のましれるや

一ことさらにつくれ出さんやうにあるを　花　三千秋来晩之候丹夜將明之天别緒依々之情虫声切々之恨遭逢斯時ことさらにまつ

くわそらんやうや

一ぬごんのみずから　護摩五壇御修法　降三世　軍荼利　金剛夜叉　中央不動　大威徳

一ぬくらんの日　法華經也

一こまとるを　粕取丸細符丸細分

あどいゐるくびや、對座にむかひさとりて姦や

一こしのべて　花　熱君きる人の陪く人出あるく紙こしを乃

まといかや

一こゝろすそて　論為日本記とと

あらひも月也や

一こかず成　こかぬるすを云や

一心くしき世　花　どこまハ仙境をいへり、去秋のつかつも去紀まりを

て古世こいへり、唇ハ外国の世をあれたる所に従るあれバくまうと

あらしいをる

一心あるそひくてれ　又ある故の心か

琴にひきさめられバしすに紙のまきまじをさがさいあかまうをさと

の哥の心也

一 胡のくまくれなくしてかなん女

若 王昭君ハ胡國の王に嫁をしるすハ何にもあるまゐれバ事あるらしくしるすをよぐす。こゝにハ我心人などをかやうれ遠國へやるくらバいかぐらるとれるをかしりんとつれぐのあまりにいまもなさるなれと家にしおふかるぐのあるにつけて昔れるをしひなす

一 このおこなひなりおんこやうし

らへのふや

道満法師居住懐磨國云々出すれ

一 こうじ 細字也 くるびれたる心也

一 こまれくるゝ女のかゝ 高麗紙也

一 こゝ海など 末玉も樹神也されバくちをあらけしと書事

一 ことよろう 何をよくいひなすや

一 こまくの侍従が母也とさるゝ物のめれと紙ハまくと名付也

一 心ぞ 天暦三年荻花ノ実れ膳打殺心葉荻花云々近代れ歌物

打殺の四角にいと金にて松の枝をして糸にて紫をむすびきめ鶴

など作てこゝろるすれ。是心葉の中也今さし横の箱にも金に

て菊を作てそへたるを云べし 拾遺の方にも心ぞと云ふ

一 この世のちぎりハ竹の中にかくやひめ竹の中におひ出されハいや

しかくんとや

一 こゝ世のあつこ 野私勘 除目成文

抄讃岐サ目従八位下巨勢朝臣相見 盡師 昌泰二二月除目執筆

時平云

一 れ歌にてくちまけさぐこめん

そよ一の中歌にてとや。天徳哥合を横をつゝ古来物語合勝負常

例也。正子内親王絵合のこと。後拾遺ニ正子内親王絵合し給ひ

うゑの菓子にうきて付けり哥あると略す

一この時よりとすゑの人いひつゝかべき　世れことくきに延喜天暦の聖代と云ゐるゝしたり冷泉院とは天暦の御宇にはすゞしへ給ひや

一松風　これ出より内の大殿のつくしせ給ひ堂　花鳥夢樓霞ちに比してゐり樓霞観は融云山庄後にちに殿たり清涼寺の東の方深院堂や法橋二人當然し清釈迦堂建立と云ふ

一こゝろもしらしらり　小高付枝のうす数九を羽の下とはさゝて山菅若は浮てきかつゝて付や荻にうきゝず荻薄菊の枝にても付や志るしばかりとは狗はねんごろにもとでと云熟殿べし

一近湯づきの名にうきとゐるも物のかし　若今素物節と云は近湯の舎人の中に東遊に達したる物節と補ひ中に番長府

掌ちどもまずりや先にようて春日祭賀茂祭の使の羽林東遊のを来十人めしぐすりに物節の近湯求子駿河舞ちど云ふ

とつともむりや陪従には府生の中才ある物を用ひ加陪従もうる近湯の官人や陪従は和琴笛ちど吹物を云也略す

一これやるとうくしぬへ　やぶるとうくしぬへや

一故大納云いまひときぎ　大鏡云三条院の御時に后にはなれんと御ぼしけり内よりは大納云の女の后に立例なりけれど御父大納云を贈太政大臣にしてこそは后にしてさせ給しかと

一子代とりといふ事　史記明君知臣明父知子

一女節にてまつり給　源のまいしきしるし女節に惟光がむすめ来りや　拝　同云源氏君は五四のかにや一動可能むすめなど

持たる人にかけ作らる云々分又受れ分ハ國司たる人也是を内
裏の女節となづくや
一こまけぞ　二夜なるもつらひ
や子細のるや
一こさあらめしをんのとり拘
河しをんハ面もそもうらしきし　おもひ葉ハよれつれ枯葉の赤
き方によりたるや　なごこハ上ニ着　おもひハきぬに必りきるるや
一心から去まつそれ　心から去に心をしめ給ひ　紅葉のたもしろき
をもしらんぞよとや
一ことぞそぞこそ　拘いひの
なまうを云や
一この月ハこされそてなり　三月ハ
去季の終也　四季終月世俗祝云をいひや
一胡地のせいしをばむなしくすてくつ　一本　胡の地　梁原四井ふ海
見　白氏文集　胡地妻子虚弃捐　従漢攻胡之時漢人止胡国不得

帰漢軍敗之故也　後又従漢攻胡之時止胡之人欲返漢也　此時弃
胡妻子而漢不入彼人刺圍之号敵国佰人也　仍両国無役之意叶
物語喩云々
一ごしとて　女師ハ法師のつ
さや　読当に女師ハ有れ
一こまくる　若反　万葉　考て二度
わく女を云や
一これ戸ぐちいるべき人も心とに
大方の人ハ輩にをじ此心也
一こひ口ろ方ハ　呼　方とハ深れ自也
いなる筋とハ　玉かづらのいかに君きなかんさや　実女に心ざしそあ
「なんのやすらひや
一こうもいのいといたくもんうれたる
紅梅のもんうきなるハうもぐ　いまやうなれハきねのきめなり
一ここぶきをん　壽詞　日本記　祝云也
一こゝまち出たる　引哥未勘
一ことくもうりしきふくろして

菅絃の窓皆袋に納本等也
若今案孔子のたうれと云るハ昔より世れとくさに云つたへたれ
ほとの聖人なれとも時としてたうなるれをことくとも本文ある
にとよもす
しいつれもさんたちとよむや
袋の名に出をも
一こゝろ　こゝろ　ことついきひう　空　もつきなと云れや　ことつき　なべし　ことに
ひいとにるくとも本もあり　花鳥　三説あけ　ひうけ　ひうけ　ひうけ　心
ねず　うつくしきすれ
一こうちきひきおとし　かけたるを引おとし　見也
一これおれづきをんざいのえん　あつ　中将の下がさねかとも

一こしゆひ　もをきをて　腰を引ゆかすも
一こらうれをけ　古老のすけ也　典侍也　二人をさしぬ人も同侍のことを至人をも
一こうぐいかさねのかしれほそなり　紅梅の唐織物のほそなりも　女乃
さうそくはもかしきぬなども
とは絃かけ　拉つけなども
海に堂にて唄ちらすべきことも　見も落梅の両の心也
一こまれかれもぐこまやかなるぞう　紙をぐうつくしくなるぞや
かるるや
これ速立也
一近傍つきれ使　賀茂祭春日祭の使　近傍司を用ふるは東遊
とまるしなや
一これ秋の行幸　呼　去秋と云ま

夜ハ長ニ居シ冬ハ秋ニ居シ此義あるを是ハ夜のうちの十月なり

一 小松がしまれよりひ　東宮をきよりひよりて源も年をつゝ給ひ也

一 こまれ　籠物　献物　毎義也よりて枝ハ四十枝也

一 こまれらんしやり　三國ハ高麗也　乱声落蹲舞れ　そこに舞す

也　左の舞ハ唐右の舞ハ高麗也

一 こひまつる人のこと　女三の形をとてあらせハ何とてねりくとなくと也

一 これ玉にひきつゝつるもしぐれ　花　先蔡天皇　文武天皇を

弾琴給ふ　呼うつかれとしけるなるを云ふ

一 こゝれ志ゝへ　さんにハ又のたゝへをしるをいへり　河一ニハ掻手　二ニ

ハ伊蜜　三ニハ水宇鞋　四ニハ蒼海波　又ニハ鴈鳴詞是也

一 又六れ志ゝ　今の世ニ無業内といへり　河万秋来　又六拈まよりを

枝ニ入るゝ故ニ　又六の枝等と云也　又六の枝六拈の枝と云心也　云ふ

一 ことし此七ニそなり給　紫ニ入れやうれ也　若紫ニ源氏ニ七ゞ

うれいもうとゝ也　此巻ニてハ十年をとりてとゝ

一 心ゆるひなく　油断もなくしきゝ心也

一 心ぬるゝなくしゝるゝ人ハ　孝経云小取雪少得福大取雪大得福

孝経至徳要道篇

一 又かひぞり　殺生偸盗邪婬妄

語飲酒

一 又十ちの此誦経　又十の此笑

なれバ此　四十笑ニハ四十ちも

一 これ志ゝの雪ニ　其下ニ子供

をへゝるも　父の為ニ云ふべき服衣を子れ為ニ云ふるをさしまゝ

のゝへり　霜の衣とハ服衣也

一 ごとなるゝバなし此枝　ごとなるゝハ

此なるゝ也　なるゝの枝とハなるゝ枝ニなれん也　紫ちれ神とハ拍

本伐さしていへり

一これはこれもこまりを侍らん。落葉

宮の御琴ともに柏木のあづかりのこゝろとれ心也

一琴はとゞめてよし後　柏木はかれなれなてよし落葉宮琴も引給ひ

ぬとれ心也。昔伯牙鐘子期とて二人なるひて琴を引し人あるを

鐘子期死て後に伯牙いふやう今より後我琴を安知者なるまじかれ

ばひがしとてやこうしとも。それを伯牙絃を絶とはいへり

一声につゝりの呼　紫侍宿のうすゝ。夕霧と柏木の知音を云

一これはことゝをなべてやとて　落葉は惣史惣をけなべきなると夕

霧はそゞのしらとも

一これはなん後ことにかゝる紀ことも

代々柏木までもち侍る名物の笛とも

一こよひあらるなる月の夕　三女東中新月色二子里外故人心

一こゝろしやり　紫陽

一こゝろいへば　こゝろ物ゆる神也

一こゝろあらるゝて　雲ゐと夕霧とは此中とこのあつての心後のこゝろ也

一此名こそ　あふ日と云るも

一これよれは得ひ　天人の心れとのづ

かゝる香也　三十二相は此二の毛穴よりる出也　大相宗相知　香殊

生るゝ時一室慧しとも　聖法太子も同

一心のなしかや　さひなしれ心也

一こゝろ　極楽の哥舞の菩薩のこゝろ

一これも月にたゞるゝ　琵琶は　撥かさしる事を隠月と云　面白詞也

本子嬌琵琶詩云中月分絃上

一こひはびてしぬるくすり　秘密

まひてしるんとしふは雪の山に流をけさうは死なんとしふはたゞひたる

と秘心をあてての給也　雪の山には菜のまゝ故に　しぬる菜はゆしきは

さうふとや

右なれば心ごとくなるとや

一これ茶一枝ゆるす　写的園中花艱類信君行打一枝春　朗詠

一これこそし　好殺これ子なるべきと云心れ　そしハ好なりしてれ

一こうしひつ　小唐櫃

こさに更てを　袴の茅れ結なる物也　茅れあるハてんねん也　たりも茶

茅をれ付ける心代合也

を益筆者　昭君貧にこそをつゝめ金にこそてよくも勉もかき

なしくるやしけるをいへり

ようきくる小虫にや

けれの銭　袋の笠なるゆへ也

一心ごとくなるき　童子ハ求法　蕙ハ蕙

一この虫ハ　かくこハ鈴せそくなる

一こうしのひとつ　引腰一袴もなし

一こうしのひとつ　毛延寿　王昭君

一このこのこと　蘿類なるべし一説本

一ごそのこれ　こうやにて碁をうつり

一こがねづくり　あしろに金れ金物也

一このたんてんハ　ちへ寄生の紙に追ゆへり申給ぬべし

一ころのとく　此比の法なきやうなるとや

一こうさんぐん　權記　行成マ長徳五年十月九日於山階寺拝見牛

馭楠檀木

を作て　緑青にて多きや

一心ごとくなる　むなきはきすうす　ぬべし

一心もとなき　何ごとこしぬ茶どもなる

一心こそうき世の　あまれうきま　あれなるや

一ひとるべ　我眾障にあるんとや

一ことくにハ　悪にハや

江

一江さらぬ　えらさぬ心也　一江ふうまじく　こへがこさ心也
一ゑんぎれば　忍うむる心也　一江んに　艶也
一江さひそつまじかれ　元蝶のつれなきゆゑゆへ後までねん
此にはさふましさとの心也　一ゑこまげて　ゑこ曲でさしも
なき女房などれるをいへる
一江ひのか　かけがうといへり又燒物の想名也　俗かけがう一座とぞ
河衣被香　一江ひそめ　蒲菊は紫宮也　紫の
くろさえ也　一ゑいなどしなへるは　葉のまて
にある詠曲のうち如べし　其海波の変に詠のうち変
一ゑいまさなへる　纓冠のうち也　着服の人　奉冠纓
一ゑひのうちしこの泪　白楽天が江州へ左遷して三月毎日に

夷陵と云所に泊て元微之に別し時作る詩の句也　醉悲瀑涙
春盃裏吟苦支頤曉燭前
一延喜のれをまち引つゝへるなり　花あやしくまゝぶもれて待ること
そしぞんかれをうまうれれてにかゝひて待れとは明石入道の筆は延喜
のれ門よりつゝりて三代に如ぬるを女のあるがきくとりくるは明石上
の筆れ上臣なるをしを入道のうち出たるも　せんにうとは延喜れ門也
一江びかうして　蒲菊鬘也　いさる紀のことゝかつらをなけなへる
かれば　えひといふかつらにあれかといふ　又後成女説かつらといへん
ゐるにそへたるも　一ゑかう　廻向
一東坂のとけ　近衛月中の将　公卿官人也　お神前求子をま
ふとも　一ゑほうしばかり　礼義也

一江ようこそ　縁也

一ゑうちゑ　笑がちゑ也

て

一てくる夜のさんじ　輦れる　仰出さるゝ也　河　輦車を石階のうるき門よりのれり　中宝を出入のくめ也　中宝の輦車とも云　牛車ハ牛れよる所までのる也　若今案温明殿後涼殿ハこれ中のへの門内の殿也　温明殿ハ内侍所おりします殿也　東の宣陽門の中に有　後涼殿ハ西の陰明門の内にあり　此寒の詞よこうらうてんよりとよりさふらひなふ衣更のざうしとかようつさせなて上つが口を給りすとこしたる延喜式にまし人及親王ハ後涼殿の後をうきるといへり　拙所の心にあひかなく

一江ゑうね　鞍也　ほむる詞也

里文兵衛の陣と云ハ中れ宝れ門の外也　閤門といふハ中れ宝忠門と云也　云ゝ　親範玩云　かつられ車よりハちいさくてとこれおなるき車也　しられ式物をとゞめて六府の官人のやくにてさして出入する也　云ゝ

一てうと　調度

一立子院　寛平法皇の御事也　延喜の父御門宇多の帝とも申也　御絵をうせ給にてなし　哥れるす　如べし　紅葉をれ名をとらすふる物ハ其れ物もふ　紐乃調ちりかけ　一番　立子院の御手にてうる物なへる也　伊勢集に

一てうし　調との義也

一てまつこそ　手まつこそハ我物にして也　荻壺を紫の根に

してこれによく似なへるを云也　いろしかハいろかや

一朝拜　正月朔日の小朝拜を云　朝賀のすにはあらず　畔

清浄教の前の庭に法眼辞也

一天地ことをさへ　てん地とまづことよむべし

一天にむまるゝ人の　生天先堕三途天に生るゝ者おほくして三途におつる事なかれ又ゝ縁にひかれてつねに一時に天に生るゝまゝ畢　天人の五衰をいふなり

一天のまなこ　天眼也

一天べんまどきまりに　天がたも

一蝶鳥ふるは八人　花のけしに舞ふなどまさるに花瓶をもちたる童の手拍子舞人なるなり

一てふいまして　童の舞なるすがた如くし

一てうちぬ心ち　畢　よきたるを双六にうちぬ心也

一殿上人かれいの内裏家のあるすまい　殿上人は禁中に

はべらず院の殿上人東家の殿上人あつまりて遊びにゆかれあれて昇殿するなどのつかを中にみるをまでへ院にて昇殿しるといふとも内裏にて昇殿あればば殿上の役にまいらするもありなり也云々

一てうち　調楽也　一てうち　手掻人にある

れど云に不むして手をてうちさすと云也

一天人のあまくだるゝ　くや舞を行ふ舞たまへる家乃中ひらき八月十五夜に天のふかいしや

一てんく　天狗と云は星の名　天狗に用る所は天魔の類にいへり